

SR1 サタンの反乱 艱難への序章

第1部

サタンの反乱と墮落

(オンラインでもご覧いただけます。www.ichthys.com ←英文です)

ロバート・D・ルギンビル博士著

「サタンの反乱―艱難への序章」シリーズの目次：

第1部：サタンの反乱と墮落

第2部：創世記における空白期(ギャップ)

第3部：人間の目的、創造と墮落

第4部：サタンの世界システム。過去・現在・未来

第5章：裁き、回復、交代

第1部の内容

I. はじめに

II. 天使の前史

III. サタンの本来の地位

IV. サタンの性格、罪と墮落

シリーズの紹介

この5つのシリーズは、聖書の終末論の研究に不可欠な入門書となります(字義どおり「終わりのことについての学び」)¹。サタンとその天使たちの神への反逆、人間を創造した神の反応、人類の歴史を通じて続くサタンの反撃、イエス・キリストにおける神の答え、サタンの受ける最終的な処分、関連するすべての問題に対する神の解決、そして人類の歴史の最終的な終結を順を追って取り上げています。

I. 第1部の紹介：サタンの反乱と墮落

¹ 聖書の基本教義の第二部後半終末論研究：「終わりの事柄」についての学びにおいて、この主題の概要を述べています。

1) 宇宙を創る前から、神様は存在していた：サタンが創造される前に、つまり天使の創造される前に、そして人間の創造の前に、神様はおられました。三位一体の神(父、子、聖霊)は、人間、天使、宇宙、さらには時間そのものに制限されたり影響されたりせずに、常に存在しておられます。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。

すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(ヨハネの福音書 1章1-3節)

イエス・キリストを信じる私たちにとってこの事実を覚えておくことは重要です。サタンは、その恐ろしい力を持っていますが、神が創造した時間と空間の宇宙の中で活動している被造物に過ぎません。神のご意思とその全能の力に完全に服従しているということです。私たちや、サタン、墮天使を含むすべての被造物は存在するために、時間と空間の有限の環境が必要であり、それによって制限されていますが、全能の神は、そうした有限な環境に依存したり、制限されることは一切ありません。²

この世界と、その中にある万物とを造った神は、天地の主であるのだから、手で造った宮などにはお住みにならない。また、何か不足でもしておるかのよう、人の手によって仕えられる必要もない。神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、(使徒行伝 17章24-25節)

相対的な力の観点からすると、無限で全能の主と、サタンとその部下である天使たちの能力を比べてみても、この両者の間では「争う」対象でさえありません。もし神が悪魔とその手下を消滅させることを望むなら、神は何の努力もなしに一瞬にしてそうすることができます。神がそうされなかったことは、私たちと関わりを持ってくださる神の素晴らしい御性質ゆえです。サタンの存在と、創造主に対する反抗が許されているということ自体、神が被造物をとっても愛しているからです。父なる神が私たちに対して持っている最高の愛は、神のひとり子である主イエス・キリストが私たちのために犠牲になられたことで明らかですが、私たちに、そして神のすべての被造物に、自分の自由意志で神に従いたいかどうかの選択の余地を与えておられることにも、その愛を見ることができます。神はすべての被造物を完全な愛で愛しておられますが、誰にも神を愛す

² 神の本質、御性質にもっと焦点を当てている聖書の基本教義：神学：神についての学び
第一部 参照のこと。

ようにお返しを強制することはされません。人間であれ天使であれ、歴史が最終的に終わりを迎えるとき、主と永遠に共にいることになる被造物は、それを自ら選択した者だけです。

天使や人間を含む被造物の歴史は、とても簡単に言うなら、それぞれが神の側につくのか、神に反抗するのか、神の素晴らしい愛を受け入れてそれに応えたいのか(そして永遠に神と一緒に過ごしたいのか)、それとも神の愛を拒絶したいのか(そして永遠に神から離れて過ごしたいのか)自ら選択をする機会なのです。この世に生きる私たちにとって、その選択は、単純な選択で、信仰によってイエス・キリストに従う者となるか、それとも私たちのために死んでくださった御子の筆舌に尽くしがたい贈り物を拒むかというものです。しかし、天使たちも主の創造物ですが、サタンは反逆の選択をすでにしています。主の最高の被造物であるサタンの反乱を機に、主は御自身の英知を示されました。それは以下のことに表されます：

- 1) 私たちが主を選んだことを正当化され(サタンの反対にもかかわらず、私たちが主を選んだのだから、その選択は本物であるに違いありません)、
- 2) 私たちへの愛を示してくださり(サタンがアダムを誘惑したことで、私たち全員が罪の下に置かれ、そのために<罪からの解放のため>御子である主イエス・キリストの犠牲が必要となりましたが、まさに主の愛が体現されることになりました)、
- 3) その過程でご自身の栄光がさらに表されます(サタンの反乱をやり遂げさせることによって、悪魔に対する神の裁きが正当化されます)。

もし私たちが、悪魔とその墮落したこの世の体制によって与えられた火のような試練を経験していなかったら、神が私たちのために驚くべき備えをしてくださり、この世のすべての試練から私たちを解放してくださることを感謝することはできないでしょう(第二テモテ 4 章 18 節)。悪魔の世界の中で神の恵みを経験することによってのみ、私たちは神の深い愛を理解し、感謝するようになり、同時に私たちは神への完全な真の愛へと導かれるのです。神の計り知れない、隠れた知恵に感謝します。

2) 神様の宇宙の創造：神による今の宇宙の創造は、義務によるものでも、神が必要に駆られてされたものでもありません。神は、時間の存在する以前に、一瞬のうちに、時間と空間とすべての物質を無から創造されました。³ 神は、被造物である私たちが存在するための時間的・物質的な環境を私たちに与えるためにそうされたのです。つまり、現在の世界とその被造物は、私たちと神の天使たちに、自由意志を行使するた

³ 従来から言われている、この「エクス・ニヒロ (<無=ゼロから>の意)」創造は、「創世記のギャップ」第二部にて詳細に触れています。

めの居場所と機会を与えるためにあるのです。神は霊的で無限のおかたなので、存在のために有限の宇宙を必要としません。彼がそのすべてを創られたのです。それは、私たちが神を求め、神を知り、神に従うことを選び、神が最初に私たちを愛して下さったように、私たちが神を愛するようになるために、私たちの益のためにあるのです(使徒行伝 17 章 26-27 節、ヨハネの手紙第一 4 章 19 節)。私たち人間が自分の命と愛を分かち合いたいと願い、この世に子供を生むように、天の父は私たち、すなわち神の子供のために、私たちの利益と神の栄光のために天と地を備えられたのです。私たちはおもちゃでもペットでもロボットでもなく、主の子孫なのです。(使徒 17 章 28 節)。私たちと私たちをとりまく周りの全ての被造物は、偶然によるものではなく、私たちの父なる神の比類ない知恵、目的、愛によるものです。その紛れもない裏付けは、神様が、ご自身のひとり子を遣わし、私たちと同じように血と肉を持たせて、私たちの身代わりの死を遂げさせ、それによって私たちが永遠の命を得るようにされたという事実です。

3) 神による天使の創造：現代のクリスチャンは、大衆文化の中で天使に関する誤った情報に常にさらされているので、天使について聖書の観点から考えてみるのが助けになります。聖書の中では、天使はあまり目立たない存在です。聖書の約半分の書には、天使についての言及はまったくありませんし、少し考えてみれば(あるいは調べてみれば)、聖書の物語の中で天使が出来事の焦点となることはほとんどないことがわかります。これには非常に大きな理由があります。神は、聖書をこの世界のこの場所における信仰と行動の基準として人類に与えられました；つまり、聖書は神が**私たち**をどのように取り扱っておられるかを説明するものであり、神が天使をどのように扱っておられるかについては、ところどころで触れているだけです。なぜなら、天使とその活動に過度に魅了されること(特に、聖書に含まれる正当な情報をはるかに超えるもの)が、信者と不信者の両方にとって大きなつまずきとなっているという事実があるからです。今もなお、＜天使についてのそうした記述が＞主であり救い主であるイエス・キリストの救いの知識(学ぶべきことが非常に多い)や、聖書の他の教義から私たちを引き離し、代わりに空想の世界(すなわち、天使とその活動に関する誤った情報)に注意を引きつけているからです。天使の領域に関する知識が重要でない、必要でないというわけではありませんが、聖書は天使のテーマを「知る必要性」に基づいてアプローチしています。つまり、必ずしも知りたいことをすべて教えてくれるわけではありませんが、世界と私たちに対する神の計画を理解するために知っておくべきことはすべて教えてくれているのです⁴。選ばれた天使と墮落した天使の行動、機能、組織については、このシリーズのパート 4 で扱われていますが、ここでは、聖句から、私たちの現在の研究に

⁴ ルカ10章20節において私たちの主は適切な見解を述べています：「しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしろされていることを喜びなさい」。

関係する、分かる基本原則のいくつかを概説します。

a. 天使は人類とは別の類の被造物

万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(コロサイ 1章16節)

天使に関する現代に広まっている最も質の悪い誤解の一つは、死人が天使になるという、全く誤った有害な考え方です。これは真実からかけ離れています。聖書は、神の創造において天使が人間に先行していたこと(ヨブ記 38 章 6-7 節)、人間はもともと天使の創造に比べて栄光も力も少ない状態で創造されたこと(詩篇 8 篇 4-5 節)を明確に示しています⁵。

b. 天使は有限の存在：天使は現在、明らかに優れている存在ですが、時間と空間に依存しています。天使は人間より力があり(第二テサロニケ 1 章 7 節; 第二ペテロ 2 章 11 節)、すばやく(創世記 28 章 12 節)、知識も豊富(サムエル記下 14 章 20 節)ですが、全知でもなく(マタイ 24 章 36 節)、全能でもなく(ローマ 8 章 38 節)、どこにでもいるというものでもありません(ダニエル 10 章 13 節)。天使はしばしば「天の軍勢」と表現され、無数の星に例えられ(例えば、ヨブ 25 章 3 節、詩篇 103 篇 20-21 節、イザヤ 40 章 26 節、ルカ 2 章 13 節)、高度に組織化された集団であり、非常に数も多いのですが、その数がどんなに多くても、有限であることを理解すべきです(申命記 33 章 2 節、詩篇 68 章 17 節、ダニエル 7 章 10 節、ヘブル 12 章 22 節、黙示録 5 章 11 節)。

天使が霊的な存在なのか、物質的な存在なのかについては、何世紀にもわたって議論されてきましたが、ヘブル 1 章 7 節や 14 節などを理由に、前者を支持する意見が多いようです。実際、聖書に描かれている天使は、私たちが働いている物質的な制約の多くを受けていません。天使は歳をとることも、空腹になることも、疲れることもないようです。時には、人間の体に入り込むこともできますし(悪魔に憑依された場合など:ルカ 8 章 26-39 節)、私たちの世界で仕事(場合によっては悪事)をしていても、ほとんどの場合、私たちには全く見えません。これらの事実は、天使の性質が非物質

⁵ 天使と人類の違いについて次の聖句も参照のこと： コリント第一 6 章 3 節、ヘブル 1 章 14 節、ヘブル 2 章 16 節；12 章 22-23 節

的であることを物語っています。しかし、天使は肉体を持って現れることもありますし(キリストの誕生を知らせるときなど:ルカ 2 章 8-15 節)、物質世界に大きな影響を与えることもあります(風を操る天使のことを考えてみてください: 黙示録 7 章 1-3 節)。これらの事実は、上述の時間と空間に従属していることと合わせて考えると、天使は実体が「霊的」であっても、ある種の物質的な制約や拘束を受けてしまうことがあることを十分に明らかにしています。例えば、神の裁きによって閉じ込められたり、強制されたりすることがあります(墮天使の最終的な処分の場合:マタイ 25 章 41 節)。

人間は霊的な生き物であると同時に物質的な生き物でもあります(これについてはこのシリーズの第3部で詳しく説明します)、現在の体が地上の性質を持っているのに対して、来るべき体は天的な性質を持つと言われています(復活したキリストの例で示されています)⁶。使徒パウロが言うように、「(人間の体は)肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえる」(コリント第一15章44節)。この「霊の」体は、本当の意味での「体」であることを、私たちはキリストの例から知っています。疑い深いトマスが最後にイエスを見たとき、イエスは「あなたの手をわたしの脇腹に差し入れなさい」と言われましたが、これは主の新しい「霊的な体」の本物の物質性を示すためでもあります。このように、復活の前も後も、人間は真の肉体を持っていることが特徴的です。しかし、天使たちはそうではありません。ルカ24章39節では、復活した主が怯えている弟子たちに現れて、「霊(プネウマ---ヘブル1章7節と14節で天使に使われている言葉と同じ)には、あなたがたが見ているように、私が持っているような肉と骨はありません」と断言しています。霊は喜んでいますが、肉(今)は弱く、私たちに立ちはだかる誘惑の主な原因となっていますが、天使にはそのような誘惑はありません(例えば、お金は必要ありません)。しかし、不思議なことに、真の肉体でなければ得られない感覚的な経験が天使達にないことが、少なからず、サタンの天使の多くが恩寵から脱落する原因となったようです(後述の第IV部参照)。

c. 天使は多くの点で一時的に人間よりも優れている: 天使も被造物であり、無限の力や能力を持っているわけではないことを確認した上で、この天使の力や能力が、特に人間と比較して相当なものであることを認めることは大切です。まず第一に、天使は死なず(ルカ 20 章 36 節)、繁殖もしない(マルコ 12 章 25 節)ので、その総数は、創造以来同じであるという結論に達します。もちろん、墮天使たちが神から永遠に離れ、永遠の罰を受けることがないわけではありません(人間の場合は「第二の死」と呼ばれる出来事です。黙示録 20 章 14 節、マタイ 25 章 41 節)。このように、人類が地上の棲家における滞在を享受している一方で、天使は人間が創造される以前か

⁶ 復活についての詳細は、ペテロ・シリーズのレッスン # 20 を参照のこと。

ら、天上での滞在を経験しています。天使は人間のように時間や空間の制約を受けないので、知識や知恵に優れていることは間違いありません。天使の性質は、その本質において、外見、知性、力、機動性、権威の点で、現在の地上の人間の性質よりも優れていることを指摘しなければなりません(第二ペテロ 2 章 11 節)。しかしながら、私たちの主(復活における私たちの先駆者)が、その人間性の面においても、また他のあらゆる点でも天使より優れているように(ヘブル 1 章 4 節～2 章 18 節)、私たちもまた、復活において主とその優れた点を共有するように運命づけられているということも覚えておくべきです(1 コリント 6 章 3 節;ヘブル 2 章 5 節)。

d. 天使はいくつかの重要な点で人間と似ている: 天使は現段階の人類に比べて優れているものの、神の同朋の被造物として、いくつかの重要な属性を私たち人類と共有しています。天使は私たちと同じように、人格と個性を持っています(例えば、喜び:ヨブ 38 章 4-7 節、ルカ 15 章 10 節、欲求:第一ペテ 1 章 12 節、選択:ユダ 6)。そして、私たちと同じように、神の栄光のために神に仕え、神を礼拝するために創られました(詩篇 103 篇 20-21 節、148 篇 2 節、マタイ 4 章 11 節、ヘブル 1 章 14 節、黙示録 4 章 8 節)。人間の場合と同じように、神は天使にも、この奉仕と礼拝を強制されてするのではなく、自分の意志で自ら進んですることを求めているのです(私たちが御子イエス・キリストへの信仰を通して自由意志で神に忠誠を誓うことを神が望まれているようにです)。このことについては、聖書の他の箇所でもとても明確にされています。ほとんどの天使は創造主に従い、仕えることを選択していますが、一部の天使は創造主を拒絶し、その行動の結果に直面するよう運命づけられています(マタイ 25 章 41 節)。この二つの天使のグループは、伝統的に「選ばれた御使いたち」と「墮天使」と呼ばれています(それぞれ第一テモテ 5 章 21 節とイザヤ書 14 章 12 節に基づいています)。墮落した天使については、特定の聖書の記述(ヨブ記 4 章 18 節、第二ペテロ 2 章 4 節、ユダ 6 節など)や、サタンとの関係(墮落については後述します)から、彼らの「墮落」状態は創造主、自らの決定の結果ではなく、創造主とその権威を拒絶するという背く天使ら自身の選択から生じた結果であることが分かっています。この道徳的な説明責任こそが、天使と人間の最も重要な共通点です。私たちは共に、神に従うか否かの主要な選択を与えられている存在なのです。

天使の選択と人間の選択の特徴の違いは、それぞれの性質の違いによって完全に説明できます。元々聖なる状態であった天使達は、その選択の決断を人間が創造される前のはるか昔に下していました。一方、私たち人間は、地理的にも、知的にも、また肉体的にも制約されていることはもちろんのこと、寿命にも限界があります。さらに重要なことは、私たちは生まれながらにして罪深い存在であり、その結果、救われるためには、(イエス・キリストを信じることによって)罪から神へと立ち返ることを選ばなければ

ばならないという事実です。それと対照的に、天使はすべて聖なるものとして創られており、宇宙の主の忠誠を誓うか、それとも神から離れてサタンの罪深い反逆に加わるかという、全く異なる選択を迫られていました。

このように、私たちと天使との間で選択肢が異なるのは、それぞれの本質の違いからくるものであるとわかります。天使は本来、神に忠実であるかどうかという最終的な決断は、過去の永遠から未来の永遠までの自分自身の在り方そのものであるように思われます。つまり、天使達は、私たち人間のように(悔い改めにせよ背教にせよ)「思考に影響を与える」要因となる肉の制限、限りある知識、曖昧な感覚などといったことには左右されません。天使が持っている長寿、知性、能力は、明らかに、時間的展開にほとんど影響されない意思決定の確実性と決断力を生み出します。私たち人間は、時間の経過がもたらす視点の変化を経験しています。それは、知識、経験、そして知恵が徐々に増えていくことによるものです。天使は、創造された時点では知性と知識において圧倒的に優れていて、成熟と老化のプロセスを経験することなく、すでに何千年も生きています。天使は学習能力がないとか、人間の歴史における神の計画の展開に驚かされることがないというわけではありませんが、天使の視点はより普遍的で霊的、さらには永遠的なものであることを示しているように思えます。天使の意思決定は、私たち時間的な制限を受けている存在が完全に理解できない方法で、時間を包含する、または「またぐ」ように思えます。そのため、天使たちは(最初は完璧で、その忠誠心を確認されたか、反抗して墮落したときに失ったかのどちらかですが)、主に対する自分の決断は、一度きりのきっぱりとしたもののようです。彼らは、私たち人間が、時々主に立ち返る(あるいは、悲しいことに主から離れる)というような「心の変化」を体験しません。それはまさに彼らの性質が私たちとあまりにも違うからなのです。このように、神によって創造された私たちの仲間である天使達にとって、主を選ぶか、主に背くかということがその存在の中心課題であるという事実は、私たちと同じですが、人類が存在する以前の過去において、天使達がした選択の方法は、私たち人類が歴史を通してしてきた方法とは異なります。

実際、私たちが心を変えることができる(悔い改めることができる)ということや、さらには、神が私たちの悔い改めを受け入れ、私たちを罪から解放する方法があるということは、天使たちにとって驚きと魅力の源です(例えば、第一テモテ 5 章 21 節、第一ペテロ 1 章 10-12 節)。私たちが天使の視点から物事を見ることが難しいように、天使も私たちのように霊と体のある生き物ではないので、私たち人間の視点を完全に理解することはできません。どうしてでしょうか？ 天使たちは(「逆戻り」のような)悔い改めは、本質的に不可能な存在だからです。一方、人間の場合は、不完全で助け(キリストの犠牲によって与えられる救い)が必要な状態からスタートします。救いを得るまでの過

程では、様々な紆余曲折があります。 限りある人生、肉(特に墮落した肉)を持っていることによる圧力や誘惑、天使の次元からの攻撃(サタンがいなければアダムとエバは罪を犯していなかったのでは?)を受けながらも、間違った道を選ばないようにしなければならない不完全な被造物で、イエス・キリストの命による永遠の命を恵みによって頂くために、イエス・キリストとの歩みを続けることを選ばなければならない罪を抱えた被造物なので、同朋である天使たちとは非常に異なる立場で、知識も限られているのです。

このような私たちの性質の違い、自由意志による選択の本質の違い、そしてそれゆえに、神の私たちへの対処についての見解の違いは、天使と人間それぞれに対する神の対処を正しく理解するために重要です。これは、天使は神の救いの計画が地上で展開されるのを見て、神について実際に学んでいるという聖書のあかしを理解するのに役立ちます⁷。

1. (天使達は)イエス・キリストの生涯を観察していることからわかります。

確かに偉大なのは、この信心の奥義である、「キリストは肉において現れ、霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた」。
(第一テモテ 3章16節)

2. (天使達は)信者の成長を彼らが目撃したことからわかります。

わたしは、神とキリスト・イエスと選ばれた御使たちとの前で、おごそかにあなたに命じる。これらのことを偏見なしに守り、何事についても、不公平な仕方をしてはならない。(第一テモテ 5章21節)

3. (天使達は)神様の救いの計画について知りたいと思っていたことからわかります。

この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たち

⁷ クリスチャンの試練における天使の務めという主題についてのさらなる詳細については、ペテロ・シリーズのレッスン # 22 を参照のこと <訳者註：サイトの英文のみ>

のうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1章10-12節)

他にも、使徒たちは「人間だけでなく天使たちにも、全宇宙の見世物にされた」(第一コリント4章9節)、「天使たちのために」女性は頭に権威のしるしを保つべきである(第一コリント11章 10節)、悔い改めたすべての罪人のゆえに天使たちによる「天での喜び」があります(ルカ15章10節、ルカ12章8-9節、黙示録3章5節参照)、しかし、キリストを拒否して反キリストを崇拜する者は「**聖なる御使たちと小羊との前で**」苦しめられます(黙示録14章10節)。さらに、キリストの生涯における主要な出来事のすべてに天使が存在したと記録されていることは、非常に重要です。キリストの誕生(ルカ2章13-14節)、誘惑(マタイ4章11節)、復活(ルカ24章4節)、昇天(使徒1章10-11節)、帰還(第二テサロニケ1章7節)など、キリストの生涯における主要な出来事のすべてに天使が立ち会ったと記録されていることは、神の計画の最も重要な段階において天使達の関与を強調しています⁸。

このように、人間の問題に対する天使の関与は、私たちに代わって彼らが自分達の義務や任務を成し遂げる以上の意味があります。(例えば、ヘブル1章7節と14節)。天使は、人間が罪による奴隷状態から逃れ、神を選び、あらゆる反対にもかかわらず神を信頼するのを見て、神について非常に重要なことを「学んで」いるのです。つまり、イエス・キリストの使命、犠牲、勝利における神の義、神の正義、神の力、神の愛と共に、信じる人間にもたらされている効果を目にするのです。

神が御子イエス・キリストの犠牲を通して、またその犠牲に基づいて、私たちに対して忠実でいて下さることは、私たちの救いとその後の霊的成長にとって不可欠ですが、それと同時に、天使たちにとっても重要な「教訓」を受けるのです。私たちは、救われた時やその後の経験によって、神様の誠実さを学びますが、聖なる天使たちは、救われる必要もなく、飢えたり渴いたりしたこともなく、危険にさらされたり、死の恐怖や悲しみを経験したこともありません。天使は、その性質上、人間の存在を規制するほとんどの圧力から免除されているので、神の忠実さを個人的に学ぶことはできませんが、悪

⁸ 参照資料：組織神学 L.S. Chafer(Dallas1497)v.2,p.26

魔の攻撃にさらされているこの地上の私たちに対する神の偉大な愛と慈悲を観察することによってのみ学ぶことができます。天使はキリストによって、キリストのために存在していますが、十字架の犠牲と、信じることを選んだ人間に対して、まことに満ちた神の計画の実行を実際に見ることによってのみ、キリスト(と父)を完全に理解することができます。

このように、人間の歴史における神の救いの計画の実行を天使がよく観察することは、戦略的にも(すなわち、キリストによる受肉、死、復活、昇天、会合、再臨、を通しての救いの提供)、戦術的にも(すなわち、個々の信者に救いを与え、その歩みを支えること)、神が悪魔の業を滅ぼし、被造物に究極的に調和と秩序を回復するために必要な要素なのです(ヨハネ第一の手紙 3 章 8 節)。

1. キリストにあるすべての選ばれた天使と人類の究極の**完成**から見られるように:

(天の父は)御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。

それは、時の満ちるに及んで(つまり、「この終わりの日にあって」;ヘブル1章2節、ペテロ第一1章10節)実現されるご計画にほかならない。それによって、神は**天にあるもの**地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。(エペソ人への手紙1章9-10節)

2. 私たちのために御子を死なせた神の計り知れない知恵が、教会を通して天使たちに明示されている

すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝え、

更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである。

それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、(エペソ人への手紙 3章8-10節)

3. キリストを通して天上のすべてのものの究極的和解から見られる

神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、そし

て、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、
天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである
(キリストによって、その十字架の血によって平和を実現したのです)。(コロ
サイ人への手紙 1章19-20節)

上の三つの聖句は、神の救いの計画が天使に与える影響を説明しています。キリス
トの犠牲と、その結果として神がイエス・キリストの教会を形成して異邦人を召されたこ
とを観察することによって、天使たちは、1) 神の計画におけるキリストの権威と中心性
(エペソ 1 章 9-10 節)、2) キリストを遣わし、教会を呼びだされた神の計画の息を呑む
ような知恵(エペソ 3 章 8-10 節)、3) キリストの犠牲に基づいて天と地に完全な調和と
平和を再確立する神の計画の究極の効果(コロ 1 章 19-20 節)について学びます。

最後に取り上げたコロサイ 1 章 19-20 節の指摘には、いくつかのが必要でしょう。こ
の天使の「人間の歴史を観察することによる教育」の一つの要素は、間違いなく、サタ
ンの反乱に神が立ち向かえないという欺瞞的な(そして自己欺瞞的な)主張を完全に
否定することです。この主張は、第一に仲間の天使を欺いて自分の味方につけるため
に使われ(下記の第 4 節を参照)、第二に人間を欺いて陥れるために使われました(こ
の作戦は今でもまさに進行中です:このシリーズの第 4 部を参照)。サタンの墮落と現
在の手口について私たちが知っていることに基づいて、この誤った仮定の本質を次の
ように再構成しても、大きな間違いではないでしょう。

なぜなら、もし神が私たちを滅ぼしたり、あるいは永遠に罰したりすれば、宇宙が
必要としている完全性と神性に満ちた調和が永遠に失われてしまうからである。

- 1) 神は私たちの代わりを見つけない(完全性がない)、
そして
- 2) 神は我々を更生させることができない(調和がない)。
- 3) したがって、神は私たちを罰することはできない。

神の力のすごさを私たちよりもはるかによく知っていたサタンが、神の怒りから自分
を守るために、神の御性格を隠れ蓑にしていたというのは、なんと皮肉なことでしょう。
普遍的な秩序と調和の破れを容認するか、サタンを打ち砕いて統一と平和を永遠に
破壊するか、という解決不可能なジレンマに神を陥れようと考えていたに違いありませ
ん。サタンは、神が悪を容認する代わりに、神の創造物に永久に傷をつけるような取

り返しのつかない行動を取ることを期待していました。しかし、サタンは、私たちの神（時が始まる前に万物の初めと終わりを計画され、それゆえに欺かれることができない方）の計り知れない知恵について、宇宙の誰よりもよく理解していたはずなのに、この最も重要な配慮を怠りました。まさにこの事実をサタンとその従者たちに示すためのキリストによる父の偉大な救いの御計画は現在進行中で、以下の主要な事柄に要約できます：

1) 置き換え：選ばれた人類は、事実上、神の普遍的な秩序の中で墮落した天使に取って代わることになります（ルカ 10 章 17-20 節；コリント人への手紙第一 6 章 3 節；黙示録 20 章 4 節）。サタンは、神が他の生き物を生み出す能力があることを知っていましたが、そのような行為は無駄であると考えていたようです。なぜなら、必要な自由意志が与えられれば、新しい生き物は天使と同じような反応をするだろうからです。しかし、選ばれた人間（救われることを選ぶもの）は、選ばれた天使（罪を犯さないことを選ぶ）を完全に補完するものであり、神との和解を選ばない墮落した天使の代わりを務めるにふさわしいものなのです。

2) 回復：選択という課題以上に、やり直せる機会が与えられるのかという課題があります。サタンは、神が罪を償う手段を提供することができないと考えたに違いありません。そうであれば、天使の更生（救済）は不可能となります。しかし、――神が人となられた――イエス・キリストの血による父の人類救済計画は、悪魔が予想もしなかった出来事でした。天使たちは、神が罪深い人間のためにひとり子を犠牲にされるという最高の代償を払われたのを見て、どんな墮落天使も悔い改めれば（これまで見てきたように、これは彼らの性質に反するものですが）、神は彼らをご自身のもとに回復させる手段を提供できたことを目にしているのです。

3) サタンの結論：神は被造物に調和と完全性を回復することができないという誤った仮定は、神が選ばれた人間を創造し、救ったことによって打ち砕かれました。キリストを通して人間を創造し、救うことによって、神は、要するに反逆のために自分を罰することができないだろうというサタンの主張の論拠の二つの支柱をたたき壊したのです。イエス・キリストによって歴史的に贖われ、終末に近づくにつれて継続して勢いを増している人間と神の和解は、サタンの自信に満ちた主張に対して、明らかな反証となっています。これは天使たちもはっきりと見たいと思っていることなのです（ペテロ第一の手紙 1 章 12 節）。

このようなサタンの根拠を考えると、最初の間が園から追放されて以来、人間の人生に働きかけてきた神の不可抗力の計画に、サタンがどうして執拗に反対してい

るのかわかってきます。なぜなら、神がキリストを通して私たちを解放し、キリストにある永遠の命を私たちに約束されたことは、神がサタンとその従者たちを取って替えることができ、またそうするつもりであり、そうしている途中であるということを、すべての天使たちにはっきりと示しているからです。その結末は、彼らを造られた方に対する悔い改めのない反抗に対する永遠の罰です。第一ヨハネ 3 章 8 節にあるように、キリストが現れたのは「悪魔の働きを滅ぼすため」なのです。

サタンはこのように、天使と人間の両方に対する神の知恵と能力をひどく誤解し、神の愛と正義と真実の究極の働きが、(イエス・キリストの犠牲によって人類のために起こったように) 贖いか置き換えか、義認か拒絶か、和解か罰かという必然的な結果をもたらすことをよく理解していないのです⁹。

神の善意は愛に溢れ、罪深い人間に恵みを与えます：

悪は、愛情深い神が咎(とが)めることができるはずがないと言うけれど、
神は私たちが生きるために御子を咎あるものにされ、
キリストの愛の血によって私たちを贖いました。

神の神聖さは正義の中に溢れ、罪深い人間に慈悲を与えます。

悪は、正義の神は赦すことができるはずがないと言うけれど、
神はご自身の御子を罪に定められることで、私たちを赦してくださり、
キリストの血をとおして、私たちを義とされました。

神の誠実と真実が人生に溢れることによって、罪深い人間に神との平和がもたらされます。

悪は、尊厳ある神が私たちを取り戻すことなどできるはずがないと言うけれど、
神は、御子を通して私たちの間に平和をもたらし、
キリストの血ゆえに、私たちを御自身に和解させ、永遠の命を与えてくださいました。

e. 天使に対するバランスのとれた見解：天使について、彼らの私たちとの類似点や相違点を議論する際に覚えておく大切なことは、天使は今は私たちよりも優れていること、最終的には彼らは私たちに従属するということです。天使は軽視されるべきではありませんが(ルカ 10 章 20 節；ペテロ第二の手紙 2 章 10-12 節；ユダの手紙 8-10 節；ローマ人への手紙 13 章 7 節参照)、崇拜すべきでもありません(レビ記 19 章 10 節；22 章 9 節；列王記下 17 章 16 節；エレミヤ 19 章 13 節；コロサイ 2 章 18

⁹ 聖書の基本教義第一部「神学：神についての学び」を参照のこと。

節参照)。この一連の注意事項は、墮天使に関しては特に重要です。サタンとその天使たちは、上に述べたような属性と経緯をすべて持っているのです。手ごわい敵です。神は、聖なる選ばれた天使たち<神に背かなかった天使達>の働きと奉仕によって、彼ら<墮落天使ら>の悪しきわざを相殺しておられるのです。したがって、私たちは敵対者とその潜在的な力に対して健全な注意を払わなければなりません(コリント第二 2 章 11 節; エペソ 6 章 11 節; ペテロ第一 5 章 8 節)、敵対者とその手下に過度に怯えてはなりません。また、選ばれた天使たちが私たちのために積極的に働いてくれていることを意識し、感謝しなければなりません、彼らに過度に執着してはいけません(特に、彼らの存在と働きは私たちには見えません)。また、悪魔の影響を過度に恐れたり、聖なる天使の働きに過度に魅了されたりして、天使に関して聖書に書かれていることを「超えて」はいけません。結局のところ、私たちが恐れなければならないのは神であり、愛し、従わなければならないのも神であり、悪魔がこの世にいる間、私たちが目をとめるべきなのは、父なる神とその御子であられる主イエス・キリストです。

しかし、霊があなたがたに服従することを喜ぶな。むしろ、あなたがたの名が天にしていることを喜びなさい」。(ルカの福音書 10章20節)

II. 天使の前史

はじめに神は天と地とを創造された。

(創世記 1 章1節)

1) 天使の創造: 天と地を創造された後のある時期に、神は天使を創造されました(詩篇 148 篇 2-5 節、コロサイ 1 章 16 節)。つまり、創世記 1 章 1 節の最初の創造と、サタンに対する神の裁きの後に行われたヨブ記 38 章 4-7 節(下記 IV 章参照)¹⁰の地の回復の間のある特定の時点で、神はすべての天使を創造されました。神は彼らを聖なるものとして創造し(申命 33 章 2 節、詩 89 篇 7 節、マルコ 8 章 38 節、ルカ 9 章 26 節)、それぞれに明確な任務と、委ねられた権限を行使するための明確な領域を与えられました(コロサイ 1 章 16 節、エペソ 6 章 12 節、ヘブル 1 章 7,14 節、ユダ 6 節)。

¹⁰ 悪魔の反逆に応じてなされることになった神による地の破壊と回復は、このシリーズの第二部の「創世記における空白期(ギャップ)」で、詳細に取り扱われています。

2) 天使たちの領域: 天使の領域はしばしば天であると考えられており、それは少なくとも現時点では、ある程度真実です:

a) 天使達はしばしば「天の万軍」と呼ばれています(列王記上 22 章 19 節; 詩篇 103 篇 20-21 節; 148 篇 2 節; ルカの福音書 2 章 13 節)

b) 天使は天上にいつも存在する(列王記上 22 章 19 節, ヨブ記 1 章 6-7 節; 2 章 1-2 節; ルカ 15 章 7,10 節; 黙示録 5 章 11 節)

c) そして、天使達はしばしば天の星と同一視される(ヨブ記 38 章 7 節; イザヤ 14 章 12,13 節; 40 章 26 節; 黙示録 1 章 20 節; 9 章 1-2 節)。

聖書の他の箇所では、星は文字通りの星であり(創世記 1 章 16 節後半参照)、この呼称は天使の権威の領域を意味していると思われます(エペソ 1 章 20-21 節、3 章 10 節、コロサイ 1 章 16 節参照)。例えば、墮落した天使は、ユダ 13 節で「さまよう星」と呼ばれています(偽教師との比較で、「最も黒い暗闇...永遠に保存されている」という表現は、悪魔とその天使のために用意された超自然的な暗闇の中の火の池を思い起こさせます; マタイ 8 章 12 節 参照)。この言葉は、彼らが「自分の領域を守る」ことに失敗したこと、すなわち、サタンを支持して人間の問題に干渉することを選んだために、彼らが定められた天の領域を放棄したことを想起させます(ユダ 6 節)¹¹。

3) 三つの天: では、天とはいったい何を意味するのでしょうか。聖書で「天」というと、地球を超えた宇宙の三つの部分、すなわち、a)地球の大気(「空」、b)宇宙全体(すなわち「宇宙」、c)神の住まいである「第三の天」(または、一般的には単に「天」)を指しています。

ヘブライ語で「天」を意味する言葉はシャマイム(shamayim)(ymw)という名詞で、その言葉は意味深くも、数の「2」<二つ>も意味します¹²。それら二つをそれぞれ、第一の天(大気)、第二の天(地球以外の宇宙)と呼ぶことができます。

¹¹ 墮落天使らは聖書の記述によると、「神々」になりすましている悪霊どもとしてその能力においては星々に関連あるものとなっています。(申命記 4 章 19 節; 17 章 3 節; 使徒行伝 7 章 43 節) しかしながら、また場合によっては、信仰者らのことを悪魔の迫害に直面している天よりの賞賛を受けるべき者たちであることを示す星として記されています。

(ダニエル書 8 章 10-13 節,24 節; 12 章 3 節; ペリピ 2 章 15 節; 黙示録 12 章 1,4 節。

¹²

しかし、創世記1章の14節では、ラキヤ(大空-おおぞら)が太陽、月、星の場所になっています。興味深いことに、正確には「ラキヤ-ハシャマイム(raqiyah-hasshamyim)(天の大空)」です。ラキヤ(大空)とラキヤ-ハシャマイム(天の大空)の異なる表現が使われていることは明確です。今日、私たちが夜空を見上げる地上の視点からは(紀元前1400年の時点ではなおさらですが)、私たちを取り巻く天(=大気)＜大空＞と天上の天(=宇宙)＜天の大空＞は、一つの連続体として見えます。「シャマイム(shamayim)」という「二つ」を意味するヘブル語は、一つの連続体の中に二つの異なる要素(空と宇宙)があるというこの現実を完全に反映しています。これは、第一の天(大気)と第二の天(地球を超えた宇宙)をそれぞれ総称したものです。

一方、第三の天は、神の住まいです。第二コリント12章2-4節で、使徒パウロは、この「第三の天」に「引き上げられた」人のことを描写しています。4節では、その場所が「パラダイス」とも呼ばれていますが、これは聖書的には神の存在と神との交わりを示唆する言葉です(後述)。この第三の天は、旧約聖書では、ヘブル語で「最高の天」を意味する言葉、「天の天(シャメイ・シャマイム)」とも呼ばれています(申命記10章14節; 詩篇148篇4節; エペソ人への手紙4章10節参照)。このように、聖書では、天の三つの部分、あるいは階層(天空、宇宙、神の住まい)は、個々にも総称の場合も「天」と呼ばれることがあります。聖書の様々な著者は、この三つを区別する必要性を感じていません。

天使は天の三つの部分のすべてに入ることができますが、その理由については、ここで一言述べておかなければなりません。

4) 天使の活動領域: 天使が星と関係することがあること(上記参照)や、明らかに階層的な組織であること(マタイ26章53節、エペソ1章20-21節、3章10節、コロサイ1章16節、テサロニケ第一4章16節、ユダ9節参照)など、様々な理由から、天使は第二の天(宇宙全体)で権限と特定の任務を持っていると推測されますが、ただ聖書にはそのことについて詳細に説明されてはいません(ユダ6節も参照)。

私たちは、任務のために選ばれた天使達が第一の天への旅をし、神に代わって人類に奉仕することや、また墮落天使の場合は、人類に対するサタンの企みを実行しようとするということについては知っています。天使らの奉仕(およびサタンの策略)については、このシリーズの第4部で詳しく説明しますが、現時点では、この地上が天使の主な活動領域ではないにしても、彼らが地上でも活発に活動していることだけは断っておきます。ヤコブが見た有名な「はしご」の幻がありますが、天使達が天に昇ったり、地に降りてくる様子が描かれていました。これは、選ばれた天使が常に地上に留まっているというのではなく、ある程度の期間天に戻ることを明確に示しています(創世記28章12節、ヨハネ1章51節参照)。エペソ2章2節で「空中の権を持つ君」と言われて

いるもの、つまり「大気圏を権威の領域とする支配者」(ギリシャ語のアエール^{αἴρ}＜大気＞は、第一の天を指し、一時的で限定的な地上における権威を強調されている)と表現されているサタンでさえ、常に地上に留まっているのではなく、特定の機会には他の天使たちと共に、第三の天の、神のみ前に集まります(ヨブ記1章6節、2章1節、列王記上22章19節参照)。

天使たちが第三の天で神の前に集まり、神と交わることは重要であり、明らかなことです。天使たちが、この地上や宇宙全体での活動に加えて、主の前に頻繁に現れることは驚くべきことではありません。なぜなら、彼らは主の天使であり(創世記 28 章 12 節、32 章 1 節、詩篇 103 篇 20 節、マタイ 26 章 53 節)、当然ながら、彼らは主がおられるところに集まり(申命記 33 章 2 節、列王記上 22 章 19 節、ヨブ記 1 章 6 節、2 章 1 節、詩篇 82 篇 1 節、89 篇 5 節と 7 節、マタイ 18 章 10 節)、主を礼拝し、仕え、主のそばにいます(列王記上 22 章 19 節、ダニエル 7 章 10 節、黙示録 5 章 11-12 節)。少なくとも、選ばれて任務に当たっている天使たちは、人間の歴史の終わりに三位一体の神が地上に戻ってくる際にも、常にこのパターンに従います(ヘブル 12 章 22 節; 黙示録 21 章 12 節; 黙示録 21 章 22 章参照)。ですから、天使たちの集まりの場所を決めるのは、天国の特定のレベルではなく、神の存在です。そして、選ばれた天使たちがいつも主の御前に集まるように、私たちが人間の歴史と呼ぶこの短い一時的な時代が終わると、信じている人類も同様に、永遠に主の御前に集まるのです。(「教会」と訳されている)ギリシャ語の「エクレシア」とは、「集会」を意味します。この集合場所は、最終的には新しい地、正確には新しいエルサレムとなります(黙示録 21 章と 22 章)。今回の研究で最も重要なことは、天使たちの元々の集まりの場所も、天上ではありませんでした。穢される前の元の同じ地球上であったということです。

5) エデン: 天使の本来の故郷であり、選ばれた人類の究極の故郷: エデンといえば、神がアダムとエバを住ませた楽園として知られていますが、次の聖句からも明らかにように、アダムとイヴのエデンは確かに一つのエデンではあったけれども、それは最初の「楽園(パラダイス)」でも、最後の「楽園」でもありませんでした。エゼキエル 28 章 13 節、ルカ 16 章 19-31 節、23 章 43 節、コリント第二 12 章 4 節、黙示録 2 章 7 節; 22 章 2 節を参照。

語源: 「パラダイス(paradise)」と「エデン(Eden)」は、意味的にはほぼ同義です。それぞれ、「エデン」は旧約聖書、「パラダイス」は新約聖書の用語で、神が御臨在される喜ばしい場所を意味しています。エデン(ヘブル語で「עֵדֶן」は、「喜び」や「快樂」を意味します。同様に、ペルシア語である「パラダイス」(ギリシャ語パラデイス

παροδελος)は、歴史家クセノフォンが初めてギリシャ語で使った言葉で、元々は「王の私有地」という意味で、ユニークで「楽しい」場所を意味していました¹³。従って、ヘブル語の「エデンの園／喜び」という言葉に相当するギリシャ語として「パラダイス」という言葉を代用するのは、ごく自然なことでした¹⁴。それは、神の御臨在に他なりません。神の中にはすべての喜びと楽しみがあるのです(詩篇 21 篇 6 節、27 篇 4-6 節、84 篇 10 節)。

b) 幕屋の例示：イスラエルの幕屋の建設は、エデンの樂園と神の臨在の関係を説明し、たとえるのに役立ちます。幕屋の配置と器具は型であり、「天にある聖所のひな型と影」(ヘブル人への手紙 8 章 5 節)であることを思い出してください。

ここでは、象徴のすべてや律法の詳細を網羅する時間はありませんが、簡単な概説は役立つことでしょう。幕屋はそれ自体、現在の「エデン」、すなわち神が今、御臨在しておられる第三の天を描いたものです(ルカ 23 章 43 節)。

幕屋に入るには、まず、祭壇(血の犠牲が様々な形でキリストによる救いを表している。実際に犠牲の頭に手を置く場合もある)と、洗盤(キリストの犠牲に基づいて罪を洗い流す象徴的なもの)を通らなければなりません。幕屋(天国)に入るためには、(キリストの)血と適切な清め(キリストの犠牲に基づく赦し)が必要です。贖罪の日に大祭司のために定められた儀式は、神の御臨在されるところに入る道、神との交わりのエデンの喜びに入る道が回復されたことを特に鮮明に示すものです。贖罪の日、大祭司は、聖所と至聖所を隔てる幕の向こう側にいます。この至聖所は、イエス・キリストが父の御座のあるところに昇天したことを象徴するように、大祭司が年に一度だけ入る場所です。いけにえの血はキリストの働きを表し、二つの金のケルブが置かれてある「慈しみの座(贖いの蓋、贖罪所、宥めの蓋とも訳されている)」は父の御座を表し(歴代志上 28 章 18 節では「戦車(欽定訳)」と表現されていますが、これはエゼキエル 1 章 4-28 節などで知られる主の御座の形です)、キリストの働きを父が受け入れて下さることを表しています。また、主の死によって私たちが父との交わりに戻る道が開かれた直後に、ケルビム(神の神聖さを不浄なものから守る者)の刺繍が施された聖所と至聖所を隔てる幕が、上から下へと真っ二つに裂かれたことも重要です(マタイ 27 章 51 節)。

兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりこ

¹³ ネヘミヤ記 2 章 8 節、伝道の書 2 章 5 節、雅歌 4 章 13 節で使われているヘブル語「パルデシ」(「山林」「園」の意)と比較のこと。

¹⁴ 初めに七十人訳で、のちに新約聖書の訳に用いられました。

となく(天の至)聖所にはいることができ、彼の肉体(の犠牲)なる(聖なる隔ての)幕をとおり(ヘブル10章10節; 10章18節参照)、わたしたちのために開いて下さった新しい¹⁵生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、さらに、神の家を治める(この)大いなる祭司があるのだから、心は(きれいに)すすがれて(すべての)良心のとがめを去り、からだは(エペソ5章26節参照—御言葉の)清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、(ヘブル4章16節参照—祈るための恵の御座の)みまえに近づこうではないか。(ヘブル人への手紙 10章19-22節)

上記の箇所、ヘブル人への手紙の著者は、幕屋と天の御座の間の類似性を明らかにしています。契約の箱の上に憐みの座(蓋)がある地上の聖所は、紛れもなく父の御座の型であり、父の臨在の象徴です。御子イエス・キリストの効果的な犠牲があるまでは、罪深い人間は御父のご臨在される聖なるところに入ることはできませんでしたが、今では、イエス・キリストを受け入れるすべての人が、私たちに代わって御自身の体を犠牲にして「幕を裂かれた」方の御業(みわざ)に基づいて、御父のおられるところに入ることができます。イエス・キリストの犠牲的な死、復活、昇天、そして父の右の座に着くという出来事の前に主にあつて死んだ人達は(詩篇 110 篇 1 節、ローマ 8 章 34 節、エペソ 1 章 20-22 節、ピリピ 2 章 9 節、ヘブル 1 章 3 節; 12 章 2 節、ペテロ第一の手紙 3 章 22 節)、天国ではなく、地の下にある「シェオール(陰府、ハデス)」の快い場所「アブラハムの懷」に移されました(ルカ 16 章 19-31 節、サムエル記上 2 章 6 節; 28 章 15 節、列王記上 2 章 6 節、ヨブ 11 章 8 節、詩篇 139 篇 8 節、イザヤ 7 章 11 節参照)。しかし、キリストは十字架の勝利によって、御父の臨在への文字通りの「アクセス権」を勝ち取ったので、パラダイスは第三の天にあることになりました(ペテロ第一の手紙 3 章 18-19 節)。

わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた—それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存じである。

この人が—それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、わたしは知らない。神がご存じである—

パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。(コリント人への手紙第二 12章2-4

¹⁵ もともと「新しく殺された」あるいは「新しく屠殺された」の意味。

節)

幕屋は第三の天の写しで、神の箱とその憐みの座は聖所にある父の御座を表し(黙示録 5 章 11-12 節参照)、幕とその刺繍されたケルビムは神と人との間の隔てを表し、それがイエス・キリストの犠牲の死によって二つに裂かれることを表しています(マタイ 27 章 51 節、マルコ 15 章 38 節、ルカ 23 章 45 節、ヘブル人への手紙 10 章 20 節参照)。

幕屋の二つの部屋のうち、より大きな部屋である聖なる場所は、神と聖別された信者との樂園での交わりを象徴しています。新しいエデンの園のように、そこでは、主と共にいるために世を去った信者は、三位一体の神との交わりという至高の喜びを味わうことができます(出エジプト 29 章 44-45 節参照)。私たちは、キリストの犠牲を祭壇で受け入れ、洗盤でキリストの罪の清めにあずかり、金の机、金の燭台、金の香壇(金は神性の象徴)のある聖なる場所に入ります。金の燭台の形は命の木の姿の象徴であり(出エジプト記 25 章 33-34 節)¹⁶、金の机の上に置かれてあるパンは命の木の実を記念し(レビ 24 章 5-9 節の十二のパンと黙示録 22 章 2 節の十二種の実を比較してみてください。また、マナと聖餐式の類似も参照のこと)、金の祭壇の香はその香りを思い起こさせます。しかし、これらの三つの記事が最も深い意味を持つのは、真の「いのちの木」(ヨハネによる福音書 15 章 1-8 節、ローマ 11 章 17-24 節)であるイエス・キリストがたとえられているからです。命の木を象徴する永遠の命に私たちが与ることができるように、私たちの主イエス・キリストは木に架けられて死んだことが象徴されています(ペテロ第一の手紙 2 章 24 節)。

パン：金色のテーブルの上にある「臨在のパン」は、命のパンであるキリスト(ヨハネ 6 章 35 節「私は命のパンである」)が父から差し出される様子を表しています(ヨハネ 3 章 16 節)。

光：金の燭台から発せられる光は、世の光であるキリスト(ヨハネ 8:12「わたしは世の光である」)が、聖霊によって力づけられる様子を表しています(イス 11 章 2 節、レビ 1 章 4 節、ルカ 4 章 18 節「聖霊の油注ぎ」参照)。

香：聖所のベールの前にある金の祭壇から立ち上る香は、よみがえったキリストが天に昇りましたが(ヨハネ 11 章 25 節「私はよみがえりであり、命であ

¹⁶ 燭台、またはメノラは究極の「地の最善の実」であるアーモンドを象徴するのを意図し、芽吹いたアロンの杖を意味しているものです(民数記 17 章 8 節)。

る))、その犠牲によって父に最も受け入れられる救いの香りを提供したことを表しています(エペソ 5 章 2 節、ヘブライ 1 章 3 節参照)。

主にあって死ぬ祝福された人たちは皆、神の幕屋-パラダイスに入って住む特権を与えられ、そこで神との交わりを永遠に楽しむようになるのです。この三つの描写は、来たるべきパラダイスでの私たちに対する神の永遠の備えについても語っています。1) パンは、肉体的な栄養と命、永遠の命を、2) 光は、霊的な啓発と真理、神の真理を、3) 香は、肉体的および霊的な喜び、永遠の喜びを、それぞれ表しています。天国の幕屋では、イエス様の犠牲と現世で私たちがイエス様に従うことを決めたことにより、三位一体の神と永遠に交わることができ、私たちの必要なものはすべて満たされます。このように、幕屋は、現世で私たちが注目すべき永遠の至福と、キリストの犠牲を受け入れることによってそれを達成する手段を示す、効果的な表現なのです。

幕屋が示すように、エデン(あるいはパラダイス)は、神が聖別された人間と交わる場所です。罪や煩悩のない状態で神と交わること以上の喜びはないからです。しかし、忘れてはならないことは、悪魔の支配するこの世界は、パラダイスなどではなく、信者にとっては避けられない試練や苦難がありますが、神を求める者が「神と共に歩む」(創世記 5 章 24 節)ことは常に可能だということです。さらに、イスラエルの時代には、神は信者の会衆の中に住まれ(出エジプト記 25 章 8 節)、今日では、神とその御子は、信じて聖霊を受けた人々の心の中に住んでおられます(ヨハネ 14 章 23 節、コリント第一 3 章 16-17 節; 6 章 19 節、コリント第二 6 章 16 節)。今の私たちの神との交わりは、「神の住まい」が「人のところに<おりて>来る」(黙示録 21 章 3 節、21 章 22 節)とときの、来るべき復元されたエデンの至福と喜びの前触れなのです。神の被造物の一人であるサタンが、その完全な交わりから最初に墮落したことについて議論するための確かな基礎を築くために、エデン-パラダイスについて描写されているすべての箇所を包括的に検討する必要があります。

6) 七つのエデン: 前述のように、聖書のエデンとパラダイスという言葉は、神との交わりにおける完全な喜びの場所を意味する同義語です。したがって、これらの言葉は、すでに簡単に見たように、神がアダムとエバを置いた園よりも広範囲に適用されます。パラダイス(またはエデン)と名の付く場所に共通する要素は、楽しい景色や音、楽しい仕事や礼拝、肉体的霊的な完全さ、そして最も重要なのは、神ご自身のご臨在と神との交わりです。聖書には七つの異なるパラダイスが登場します。それらはすべて、天使の先史時代から終末まで、神が被造物と交わるために設けた完璧な場所です。

a) 完璧な原初の地球：最初のエデンは、神と天使らとの最初の出会いの場所だったので、今回の研究に特に関係しているものです。サタンが追い出されたのは、この最初のエデン、つまり元の完全な地球(<六日間の創造を経て>アダムとエバのエデンの園が存在する復元された地球と混同しないように)¹⁷からでした¹⁸。エゼキエル 28 章 13 節では、神がサタンに対して「あなたは神の園であるエデンにいた」と宣言しており、このことが明らかになっています¹⁹。この最初の樂園、すなわち神の王座と神の存在の場所は、興味深いことに、天ではなく地にありました(「集会の山、北の果て」。イザヤ 14 章 13 節；エゼキエル 28 章 14 節と 16 節；詩篇 48 篇 2 節とシオン山の比較参照)。この点が重要な点になるので、イザヤ 14 章の文脈の中で、他のいくつかの箇所を簡単に検討することにします。

1) イザヤ 14 章 12 節の「天から落ちた」は、黙示録 12 章 9 節の出来事を予見しています(エゼキエル 28 章 17 節後半の「あなたを地に投げうち」と同じです)。サタンは人間が創造される前に、この元の樂園から追放されていますが、天から追放されるのは将来の定められた時になってからです(ヨブ記 1 章 2 章参照<ヨブ記においては、まだサタンは追放されていません>)。

2) イザヤ 14 章 13 節の最初の部分の「私は天にのぼり」は「天に向かって」と訳した方がいい。つまり、地上にある神の御座の場所である「星々」(すなわち、他の天使たち)の真上にある集会の山の頂上に行くことを意味します(ヨブ 25 章 3 節、詩篇 103 篇 20-21 節、イザヤ 40 章 26 節、ルカ 2 章 13 節参照)。

3) 14 節の「雲のいただきにのぼり」は、この山が地上にあるにもかかわらず、雲の上にそびえるほど高く、堂々とした山であることを言う

¹⁷ このシリーズ第二部の「創世記のギャップ」を参照下さい。元の地球の破滅と創世記一章に記されている七日間の回復に関する詳細が取り上げられています。

¹⁸ このシリーズの第 5 部「裁き、回復、交代」を参照してください。名前の共通性は意図的なもので、新しく創造された人類が、サタンとその天使たちに直接取って代わるものであることを示しています(ちょうど、新しい地球上の新しいエデンの園が、古い元の地球上の古いエデンに取って代わるようなものです-詳細は本シリーズの第 2 部をご覧ください)。

¹⁹ イザヤ書第 14 章とエゼキエル書第 28 章のサタンへの関連付けについては、次の第Ⅲから詳細にわたって説明されます。

います。

また、この神の御座の高い場所とエルサレムのシオン山との間には、いくつかの重要な共通点があります²⁰。

1) 聖なる山であり(イザヤ 14 章 13 節、エゼキ 28 章 14 節、16 節)、シオン山もそうです(イザヤ 56 章 7 節; 57 章 13 節; 65 章 11 節、エゼキエル 20 章 40 節)。

2) 高くそびえ立っています(イザヤ書 14 章 13-14 節)。シオン山も同様に、他のすべての山よりも高くなるように運命づけられています(イザヤ 2 章 2-3 節、エゼキエル 40 章 2 節、ミカ 4 章 1 節、ゼカリヤ 14 章 10 節)。新エルサレムは、神の御座の前から流れ出るいのちの水の川の源として、このように優れた高さを持っているように見えることに注意して下さい(黙示録 22 章 1-2 節)。

3) 神の御座の座として、エルサレムが「世界の中心」(エゼキエル 38 章 12 節; 5 章 5 節参照)と表現されているように、当時の宇宙の中心にあり(イザヤ 14 章 13-14 節; エゼキエル 28 章 13-16 節)、神が御臨在される究極の地となります(黙示録 21-22 章)。

4) 「神の園、エデン」について描写されているように、究極のエデンである新エルサレムにもいのちの水の川といのちの木があります(黙示録 22 章 1-4 節)。

b) 暫定的な第三天国: 宇宙は本来、光の世界であったのですが、サタンの反

²⁰ 天使のいた原初のエデンが、現在と未来のシオン山と同じ場所にあったかどうかは、未解決の問題です。例えば、シナイ山は「神の山」とも呼ばれています(出エジプト 4 章 27 節)。しかし、シナイ山は裁きの山(ガラテヤ 4 章 21-34 節、ヘブル 12 章 18-24 節)であって、恵みの山ではありません。アブラハムが息子を犠牲にするように指示されたとき(創世記 22 章 2 節)、それはシオン山でした。それはイエス・キリストの恵みの犠牲を予見するものでした(歴代誌下 3 章 1 節参照)。いずれにしても、この原初のエデンは、他の三つの地上のエデン(アダムとエバの園、千年王国のエルサレム、新エルサレム)とともに、イスラエル(兼新エルサレム)の聖地の範囲内にあると考えられます(民数記 34 章 1-12 節の寸法と黙示録 21 章 15-16 節の比例して拡大された寸法を比較してください)。

逆の後、「ブラックアウト」してしまいました²¹。主が地球と宇宙を回復する前に、サタンとその仲間が自分達がいつ裁かれることになるのかという恐怖の下に、どれくらいの期間、放置されておかれたのかは知る由もありません。しかし、主が選ばれた天使たち<反逆しなかった天使達>との交わりのために、ご自身の存在を知らせるための場所がまだあったと考えることができます。その場所は、サタンの活動を抑制するための最初の裁きとして地球が荒廃した状態になったことから、天上である可能性が高いと考えられます(本シリーズの第 2 部で紹介します)。地球が回復したとき(新しいエデンができたとき)、実際に神の前で選ばれた天使たち<反逆しなかった天使達>は喜びをもってその出来事を見守っているのがわかります(ヨブ記 38 章 4-7 節)。

c) エデンの園: 神がアダムとエバを住ませたエデンの園は、七つのパラダイスの中でも最もよく知られています。このシリーズの第三部では、人間の目的、創造、墮落について詳しく説明します。そこは、他のエデンと同様、神との交わりの場であり(創世記 2 章 16-17 節、2 章 19 節、3 章 8 節)、肉体的・精神的な喜びの場であり(創世記 2 章 9 節)、楽しく働くところでもありました(創世記 2 章 15 節; 2 章 19-20 節。ただし、墮落後には汗を流して労苦するようになりました。創世記 3 章 17-19 節)。創世記 2 章 10-14 節の川の記述に基づいて、園の場所を見出そうとする試みは、創世記 7 章に記されている世界規模の大洪水によってもたらされたであろう大きな地理的変動を考慮すると、困難な作業となります。また、「クシ」(創世記 2 章 13 節)の記述は、カッシート人の土地(現在のイラク南部)を指している可能性があること(おそらくそうであろう)²²や、川が流れ降りるためには、その場所が(エルサレムのように)高地でなければならぬはずで

d) パラダイス: 主が父の御前に昇って後(のち)、主にあつて死んだ信者は、主がおられる天で主と共にいます(ヨハネ 12 章 26 節; 14 章 1-3 節; 17 章 24 節; コリント第二 5 章 8 節、ピリピ 1 章 23 節)。しかし、私たちの主イエス・キリストが復活して天に昇る前の、イエス様が十字架にかかる前の信者は第三の天に行くことは許されてはいませんでした。彼らは、イエス様がラザロと金持ちのたとえ話で「アブラハムの懷(ふところ)」(ルカ 16 章 19-31 節、サムエル記 28 章 15 節; 28 章 19 節、サムエル記下 12 章 23 節参照)と言われている場所に連れて行かれたのです。それは、イエス様

²¹ サタンの反逆の結果、元の地球と宇宙に神の裁きが下されたことについては、本シリーズの第 2 部「創世記における空白期 (ギャップ)」を参照してください。

²² 歴代誌下 20 章 16 節参照。クシュの息子ニムロドは、エチオピアではなくバビロニアで活動していました。E.A.Speiser の "The Rivers of Paradise", in Festschrift Johannes Friedrich (Heidelberg 1958) 473-485 を参照。

が十字架上で悔い改めた盗人に「パラダイス」(ルカ 23 章 43 節)に行くと言われた地上の中心にある仮のパラダイスのことです。このような(祝福された場所ではあったけれども)一時的な隔離のあった理由は、人が神の前に行く前には、その罪は贖われている必要があったからです(旧約聖書の信者たちは罪が贖われるという約束に信頼を置いていましたが、歴史的に見て、この約束は十字架まで成就されませんでした)。罪を犯した人間は、その罪の贖いなしには神との直接の交わりが不可能になったため、神は人が命の木にアクセスできないようにケルビムを園の入り口に置かれたのです(創世記 3 章 24 節)。このように、キリストがその尊い血で罪深い人類の贖いの代価を完全に支払われるまでは(ヘブル 1 章 3 節)、私たちは死ぬ前であろうと、死んだ後であろうと、神との直接の交わりをすることは認められていなかったのです(ローマ 5 章 2 節、ヘブル 10 章 19-22 節、ペテロ第一の手紙 3 章 18 節)。

陰府：旧約聖書の死者の住処(すみか)は、ヘブライ語で「シェオール」(新約聖書では「ハデス」と呼ばれることが多く、英語版では「地獄」や「墓」と訳されています(サムエル記上 2 章 6 節; 28 章 15 節、列王記上 2 章 6 節、ヨブ記 11 章 8 節、詩篇 139 篇 8 節、イザヤ 7 章 11 節など参照)。ルカの福音書 16 章 19-31 節が示すように、シェオール<地獄とか黄泉、陰府とかと色々な訳があります>はいくつかの区画から構成されています。

1) 救われた者の場所(アブラハムの胸、または楽園、キリストが昇天する前にラザロたちが住んでいた祝福の場所で、主が悔い改めた盗人に死後すぐに主と一緒にになると保証した場所。ルカ 23 章 43 節)。

2) 救われていない者たちの場所(このたとえに出てくる金持ちが監獄に入れられているシェオールと呼ばれる場所)。

3) 底知れぬ所(このたとえ話の中にはありませんが、他の箇所に記されています)、すなわち、ある種の墮天使たちが現在監禁されている場所です(ルカ 8 章 31 節、ペテロ第二 2 章 4 節、ユダ 6 節、黙示録 9 章 1-11 節; 20 章 1-3 節)²³。

十字架にかかっているイエス様を信じた強盗に、イエス様は「あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」と言われたのは、この暫定的なエデンのことです(ルカ 23 章 43 節を見てみて下さい。ペテロ第一の 3 章 19 節には、主が底知れ

²³ 創世記 6 章とサタンの天使の一部が投獄された理由については、本連載の第 5 回をご覧ください。

ぬ所という天使たちの幽閉されたところへ行って宣言されたことが書かれていますが、その時、イエス様はシェオール(あるいは地獄/ハデス)へも行かれました)。地獄と底知れぬ所には今でも住人がいますが、アブラハムのふところで祝福された住人は、主が父のもとに昇った後、天に連れて行かれて主と一緒にになりました(詩篇 68 篇 18 節、エペソ 4 章 8-10 節、ヨハネ 12 章 26 節などと比較してみてください。またこのシリーズの第五部を参照のこと)

e) 現在の第三の天：死んだ信者は現在、第三の天にいます。これは第二コリント 12 章 4 節で言及されているパラダイスです。この「天」は、父なる神の御座のあるところで、「天の天」や「いと高き天」とも呼ばれています(申命記 10 章 14 節、詩篇 148 篇 4 節、エペソ 4 章 10 節参照)。その場所と性質は、暫定的な第三の天(上記 b. で説明)と同じですが、主が父の右に昇られてから、主にあって死ぬすべての人のためのパラダイスとして機能しているという点でとてもユニークです。何よりもまず、来世での私たちの運命が、私たちの主イエス・キリストとのつながりの内にあるという事実により、大きな安心感が与えられます。イエス様は、私たちはイエス・キリストが今おられる所、つまり父の右、に行くとはっきりと約束しておられます。(詩篇 110 篇 1 節、ローマ 8 章 34 節、エペソ 1 章 21-22 節、ピリピ 2 章 9 節、ヘブル 1 章 3 節; 12 章 2 節、ペテロ 第一 3 章 22 節)。

もしわたしに仕えようとする人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。もしわたしに仕えようとする人があれば、その人を父は重んじて下さるであろう。(ヨハネ12章26節)

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。(ヨハネ14章1-3節)

父よ、あなたがわたしに賜った人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい。(ヨハネ17章24節)

それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。(コリント第二5章8節)

わたしは、これら二つのものの間に板ばさみになっている。わたしの願いを言えば、この世を去ってキリストと共にいることであり、実は、その方がはるかに望ましい。(ピリピ1章23節)

私たちがこの世を去って主と一緒にになるとき、第三の天で祝福されたすみかが私たちを待っている(コリント第二 5 章 3 節; ギリシャ語テキスト参照<魂の住む体という意味としてもとれる>)とあるように、「私たちは裸のままではなく」、つまり身体が全くないという状態ではなく、私たちの復活の時まで使うことのできる暫定的な体があり(詳細は「ペテロ書簡シリーズ」#20 参照)、その体を持つと、私たちは地上にいた時の顔姿を認識することができ(黙示録 6 章 9 節)、話すことができ(黙示録 6 章 10 節)、服を着ることができ(黙示録 6 章 11 節)、神を礼拝することができ(黙示録 7 章 9-10 節)、神と私たちの主であり救い主であるイエス・キリストとの交わりとそのすべての喜びを経験することができます(黙示録 7 章 15-17 節)。この喜びは、今の私たちには理解できませんが、私たちが第三の天に移された時から(おそらく、アブラハムのふところの場合のように、天使たちによってそこに運ばれることになるのでしょう。 ルカ 16 章 22 節参照)、どんな不幸もなくなり、主の御前で永遠に過ごすことができ、至福の時が訪れるのです(黙示録 7 章 15-17 節; 21 章 4 節)。

f) 千年王国のエルサレム: キリストが再臨されるとき、キリストはご自分の王国を築き、全世界をエルサレムから治めます(例: ゼカリヤ 8 章 3 節; 9 章 9 節; 14 章 9 節)。メシア王国の首都となるエルサレムは、地理的な意味でも、超高地のシオン山に位置し、地上で最も優れた都市となります(イザヤ 2 章 2-3 節; 24 章 21-23 節; 52 章 2 節、エゼキエル 40 章 2 節、ミカ 4 章 1 節、ゼカリヤ 14 章 10 節)。千年王国のエルサレムは、まさにエデンを取り戻したような状態になるでしょう。

主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、感謝と歌の声とがある。(イザヤ書 51章3節)

来るべき祝福された「恵みの年」(イザヤ 61 章 2 節)には、地球上の呪いが取り除かれ(創世記 3 章 17-19 節; 5 章 29 節; ローマ 8 章 19-23 節参照)、園のような状態に回復されます(使徒 3 章 21 節)。創世記 2 章 9 節の命の木や、最終的な新しいエルサレムにある「いのちの木」(黙示録 22 章 2 節)と同じように、千年王国のエルサレムにも、肉体的な祝福だけでなく霊的な祝福を与えるための木があります(参照: イザヤ 41 章 19 節; 55 章 12-13 節、エゼキエル 34 章 27 節; 36 章 8 節、黙示録 22 章 2 節)。

川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ出るからである。その実は食用に供せられ、その葉は薬となる」。(エゼキエル 47章12節)

また、千年王国のエルサレムが過去のエデンに似るようになるのは、いのちの木だけではありません。上記の木が生い茂る川は、創世記2章の川や黙示録 22 章の「いのちの水の川」と共通する重要な性質を持っています。

- 1) 中心となる水源：エデンの園から水が流れ出たように、千年王国の生ける水の川は、エルサレムの主の神殿にある源泉から湧き出ます(エゼキエル 47 章 1-12 節、ヨエル 3 章 18 節、ゼカリヤ 14 章 8 節)。これは、黙示録 22 章 1-2 節の「いのちの水の川」と非常によく似た光景です。
- 2) 周りを潤す：エゼキエル47章1-12節では、川は農業の実り豊さと豊かな漁場に関連しており、ヨエル3章18節では、泉は土地全般の豊穡さに関連しています(同様の象徴的表現がされているイザヤ66章12節の「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。」を参照のこと)。
- 3) 生命を与える影響：ゼカリヤ 14 章 8 節では、この川は「生ける水」であり、黙示録 22 章 17 節からも、この川が与える霊的な祝福を示唆しています(エレミヤ 2 章 13 節、イザヤ 55 章 1 節も参照)。

再臨に続いて、キリストによって立ち上げられる天の王国<至福千年王国>は、第六のエデンとして、その性質においても、特有な状態を示します。アダムとエバの園や最後のパラダイスである新しいエルサレムとは異なり、そこ(若返った地球)には、不完全な人(自然の体にある様々な霊的状态の人)と完全な人(復活した信者)が混在することになります。キリストの正しい統治(詩篇 2 篇 9 節)によって、人類において顕著だった罪の性質の影響(例えば、犯罪や戦争)が抑えられ、その結果、真の地上の天国、(不完全な人間も共存しているという状況下での)可能な限りの完璧な環境や、エルサレムから流れ出る美しさや音、豊かさ、肉体的・精神的な完全さが、祝福に満ちた世界を実現させます。

回復された地の美しさ:

おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、(イザヤ11章6節)

あなたの目は麗しく飾った王を見、遠く広い国を見る。(イザヤ33章17節)

荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、さふらんのように、(イザヤ35章1節)

わたしは裸の山に川を開き、谷の中に泉をいだし、荒野を池となし、かわいた地を水の源とする。(イザヤ41章18節)

あなたがたは喜びをもって出てきて、安らかに導かれて行く。山と丘とはあなたの前に声を放って喜び歌い、野にある木はみな手を打つ。(イザヤ55章12節)

繁栄と幸福のために:

「あなたの天幕の場所を広くし、あなたのすまいの幕を張りひろげ、惜しむことなく、あなたの綱を長くし、あなたの杭を強固にせよ。あなたは右に左にひろがり、あなたの子孫はもろもろの国を獲、荒れすたれた町々をも住民で満たすからだ。(イザヤ54章2-3節)

あなたの門は常に開いて、昼も夜も閉ざすことはない。これは人々が国々の宝をあなたに携えて来、その王たちを率いて来るためである。(イザヤ60章11節)

...あなたがたは...もろもろの国の富を食べ、彼らの宝を得て喜ぶ。(イザヤ61章6節)

主はこう言われる、「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、もろもろの国の富を与える。あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、ひざの上であやされる。(イザヤ66章12節)

シオンの娘よ、喜び歌え。イスラエルよ、喜び呼ばわれ。エルサレムの娘よ、

心のかぎり喜び楽しめ。(ゼパニヤ3章14節)

そこには、平和と繁栄との種がまかれるからである。すなわちぶどうの木は実を結び、地は産物を出し、天は露を与える。わたしはこの民の残れる者に、これをことごとく与える。(ゼカリヤ8章12節)

ユダもまた、エルサレムに敵して戦う。その周囲のすべての国びとの財宝、すなわち金銀、衣服などが、はなはだ多く集められる。(ゼカリヤ 14章14節)

肉体的、霊的な完全さ:

もろもろの山と丘とは義によって民に平和を与えるように。(詩篇72篇3節)

＜訳註:「平和」と訳されている言葉はヘブル語の「シャローム」で、平和の意味のほかには繁栄、恵まれた状態という意味もあります＞

多くの民は来て言う、「さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう」と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。(イザヤ2章3節)

その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる。(イザヤ4章5-6節)

その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(新改IVイザヤ9章7節)

あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ。(イザヤ12章3節)

その時、公平は荒野に住み、正義は良き畑にやどる。(イザヤ32章16節)＜「良き畑」は、他の訳では、「耕作地」「果樹園」＞

わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。

わずか数日で死ぬみどりごと、おのが命の日を満たさない老人とは、もはやその中にいない。百歳で死ぬ者も、なお若い者とせられ、百歳で死ぬ者は、のろわれた罪びととされる。(イザヤ65章19-20節)

その日、彼らの神、主は、彼らを救い、その民を羊のように養われる。彼らは冠の玉のように、その地に輝く。

そのさいわい、その麗しさは、いかばかりであろう。穀物は若者を栄えさせ、新しいぶどう酒は、おとめを栄えさせる。(ゼカリヤ9章16-17節)

その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる。(ゼカリヤ13章1節)

最も大きな祝福：イエス・キリストによる統治(詩篇2篇；45 篇；48 篇；72 篇、イザヤ2章1-5 節、エゼキエル 48 章 35 節、ダニエル 7 章 14 節、ゼカリヤ 14 章、ルカ 1 章 32 節、黙示録 19 章 11 節-20 章 6 節も参照。)

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「霊妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。(イザヤ9章6節)

その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。(エレミヤ33章15節)

「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」(新改訳IVミカ5章2節)

主はこう仰せられる、『わたしはシオンに帰って、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町となえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえられる』。(ゼカリヤ8章3節)

シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。(ゼカリヤ9章9節)

主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。
(ゼカリヤ14章9節)

g) 新しいエルサレム： 究極の永遠の状態、最後のエデンについて私たちが知っていることは、ほとんどがヨハネの黙示録(21章と 22 章)からです。新しい天と地、新しいエルサレムの場所(黙示録 21 章 1-2 節)について、聖句が明らかにしています。新天新地とは対照的に、人間の命のはかなさを表す聖書の原則(例:イザヤ 40 章 6-8 節)は、私たちが今住んでいる「古い」世界にも同じように当てはまります。

…この世の有様は過ぎ去る...(コリント第一7章31節)

世と世の欲とは過ぎ去る... (ヨハネ第一2章17節)

サタンの反逆、人間の墮落、そして人類の歴史を汚してきた罪(そして十字架上のキリストにおいて裁かれた罪)によって、私たちが今住んでいる宇宙は完全に破壊されることになります(詩篇 102 篇 25-27 節、イザヤ 34 章 4 節; 51 章 6 節; ハガイ 2 章 6 節; マタイ 24 章 35 節; ヘブル 1 章 11-12 節; 12 章 26-29 節; ペテロ第二 3 章 10-13 節; 黙示録 20 章 11 節)。私たちが永遠に神と共にいる永遠の住まいとして、神は、もはや罪や反逆のどんな汚れもなく、義のみが宿る父の王国「新しい天と新しい地」を計画しておられるのです(イザヤ 65 章 17 節、66 章 22 節、コリント第一 15 章 24 節参照)。

しかし、今の天と地とは、同じ御言によって保存され、不信仰な人々がさばかれ、滅ぼさるべき日に火で焼かれる時まで、そのまま保たれているのである。愛する者たちよ。この一事を忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである。ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。しかし、主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みなく主の検査のために>焼きつくされる<裸にされる>であろう。このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがた<クリスチャンは>は、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従っ

て、義の住む新しい天と新しい地＜世界＞とを待ち望んでいる。(ペテロ第二 3章7-13節)

「新しいエルサレム」が天から降りてくる時、この究極のパラダイスは、「天にある」のではなく、新しい地に降りてくるといことは、重要な意味を持っています(黙示録 21 章 10 節)。地に住むように創られた私たちは、天ではなく地が究極のふるさととなるのは当然のことです。エデンの原型が地上であって、サタンの墮落と反逆によって罪が生じるまで、神が天使たちと交わっていた場所も地上であったように、御父ご自身が究極のパラダイスにおいて私たちと共に住むことになっても不思議ではありません(黙示録 22 章 3 節)²⁴ 新しいエルサレムは、あらゆる意味で真のパラダイスとなります(黙示 2 章 7 節)。そこには、いのちの木(黙示録 2:7、22 章 2 節)といのちの水の川(黙示録 22 章 1,17 節)があります。そこには神ご自身がおられ、私たちは神との交わりを楽しむことができます(黙示録 21 章 3 節、22 章 3 節)。最後に、この究極のエデンは、極上の美しさを持つ場所となり(黙示録 21 章 9 節)、現世の痛みや苦しみは遠い過去の思い出となります(黙示録 21 章 4 節)。このようにして、人類にとってすべてが元に回復するのです。最初にパラダイスを失った私たちは、キリストの犠牲と神の恵みによって、最後にはパラダイスを取り戻す運命にあります。そして、神の知恵、恵み、威厳が関係している場合によくそうであるように、私たちが最後に手にするものは、アダムとエバが最初に手にしたものよりもはるかに良いものです。

h) 私たち自身のエデン：サタンの支配下にある現在の地球に住んでいる限り、私たちは苦難を受けることになっています(ヨハネ 16 章 33 節)。しかし、イエス・キリストを信じている私たちは、痛みや苦難にもかかわらず、今ここでパラダイスの最も重要な益、すなわち、私たちの神との親しい交わりを享受することができます。聖霊は、私たちの中に湧き出る命の川のようなもので、私たちの永遠の命の保証です(ヨハネ 7 章 37-39 節、ヨハネ 4 章 14 節、イザヤ 55 章 1 節参照)。私たちの主イエス・キリストも私たちの中におられます(ヨハネ 14 章 20 節、ローマ 8 章 10 節、コリント第二 13 章 5 節、エペソ 3 章 17 節、コロサイ 1 章 27 節)。イエス・キリストは真のぶどうの木、私たちは実を結ぶ枝としてよく知られています(ヨハネ 15 章 1-8 節、ローマ 11 章 16-24 節参照)(詩篇 1 章 3 節; 52 篇 8 節も参照)。イエス・キリストは、私たちのために木の上でご自身を犠牲にされ(ペテロ第一 2 章 24 節)、私たちがいのちの木にあずかる権利を永遠に享受できるようにされました(黙示録 2 章 7 節)。そして、私たちが主を愛して従うならば、父も私たちと交わることを主から約束されています(ヨハネ 14 章 23 節)。

²⁴ 三位一体の神の来臨については、「来るべき艱難」の第 6 部、VII.3 節「父の来臨」を参照してください。

だから、この罪深い地球上でも、私たちの体は、現時点では不完全ですが、生ける神の宮であり(コリント第一 3 章 16-17 節; 6 章 19 節、コリント第二 6 章 16 節、エペソ 2 章 21-22 節、ペテロ第一 2 章 5 節)、悪魔の世界の真っ只中であってパラダイスの最大の祝福である交わりを、常に自由に楽しむことができます(詩篇 36 篇 7-9 節; 46 篇 4 節参照)。

悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしぼまないように、そのなすところは皆栄える。
(詩篇 1 篇 1-3 節)(ヨハネの福音書 15 章 1-6 節参照)

III. サタンの本来の地位

サタンが神に反抗し、特権的な地位から転落する前の、原初の楽園、その原初の天使のエデンに話を戻しましょう。原初の状態のサタンについて私たちが知っていることは、主にイザヤ書(14 章)とエゼキエル書(28 章)に書かれていることによるものです²⁵。この二つの章に含まれている情報を詳細に検討すると、サタンが神を拒む前の状態をかなり鮮明にくみ取ることができます。悪魔は墮落する前は宇宙で最も優れた存在であり、以下に述べる様々な特徴は、その優れた特徴の特定の性質に注目していると言えます。サタンは、このイザヤとエゼキエルの二人の預言者によって、a)「明けの星」と「暁の子」(新改訳 IV)、b)完全な印、c)知恵に満ちた者、d)美のきわみ、e)エデンの中にいる者、f)宝石で飾られた者、g)タンバリンと笛を備えた者、h)油を注がれた者、i)ケルブ、j)「覆う」者、k)神の聖なる山の上にいる者、l)「火の石」の間を歩いている者、と描写されています。

a) 明けの星(イザヤ 14 章 12 節): この称号は、神の栄光を反映するサタン

²⁵ 聖書学者らの保守的解釈では、バビロンの王に対する「あざけり」(イザヤ 14 章 4 節)とツロの王に対する預言(エゼキエル 28 章 1 節)は、主にサタンに向けられているものだというのが一般的解釈となっています。チャーファー-Chafer が『組織神学』第 2 巻の p.46 で指摘しているように、どちらの箇所もサタンにしか適用できない内容が多くあります(例えば、「あなたはエデンにいた」(エゼキエル 28 章 13 節)などは、文字通りにツロ王には適用できないでしょう)。

を表現しています(ヨブ記 38:7 参照。選ばれた天使はすべて「明けの星」と表現されています)。ヘブライ語のヘレイル(llyh、文字通り「輝く者」)は、ギリシャ語の旧約聖書では「光を持つ者」と訳され、ラテン語のヴァルゲート訳では「ルシファー」と訳されました。「明けの明星」は、昼間でも見えるほどの輝きを持つ天体を意味し、この呼び名は適切な表現です。サタンは、暗闇のない原初のエデン(サタンの墮落以前には暗闇は存在しなかった)の主要な被造物として、神の素晴らしさを最もよく表す存在であり、すべての天使が見ることのできる創造主の輝かしい栄光を映し出していました。そのサタンが、自らの選択によって闇の領域の支配者となってしまったのは、意外で悲劇的な成り行きです(エペソ 6 章 12 節、コロサイ 1 章 13 節)。サタンは、神の栄光を反映するどころか、あらゆる方法でそれに反対していますが、彼の究極の運命は、自分の光を永遠に消されることです(ユダ 6 節 13 節)。サタンとは対照的に、新しい明けの明星である私たちの主イエス・キリスト(ペテロ第二 1 章 19 節、黙示録 2 章 28 節; 22 章 16 節、民数記 24 章 17 節、イザヤ 9 章 1-2 節; 42 章 6 節; 49 章 6 節、マタイ 2 章 2 節; 2 章 9 節; 4 章 16 節、ルカ 2 章 30-32 節、ヨハネ 1 章 4-5 節、8 章 12 節; 9 章 5 節参照)は、御父の栄光を完全に反映しています(ヘブル 1 章 3 節)。

b) 完全な印(エゼキエル 28 章 12 節): 「完全な印(あるいは均衡)」とは、ヘブル語の直訳で、「調和のとれたプロポーションに印を押す者」、さらに言うなら、「対称性の試金石」(つまり、神の視点から見たあらゆる種類の規範や基準)という意味にとることができます。墮落していない状態のサタンは、完璧な神の基準を支持し、具現化し、代表する者として見られていました。それが今では、邪悪なもの、間違ったもの、反神的なものの代表的な例となってしまったのは、悲劇的な話です。サタンとは対照的に、私たちの主イエス・キリストは、私たちの罪のために父の正しい基準を満たすために死なれた方です(コリント第二 5 章 21 節; ペテロ第一 2 章 24 節)。

c) 知恵に満ちた者(エゼキエル 28 章 12 節)。この形容詞は十分に明確です。サタンは、無知から神を拒んだものではありません。それどころか、サタンは神の被造物の中で最も知恵がありましたが、その知恵を変質させてしまいました(エゼキエル 28 章 17 節)。サタンがこの知恵を汚したために、神の知恵と真理に対する敵、いわゆる「嘘の父」となってしまったのは、悲劇的な話です(ヨハネの福音書 8 章 44 節)。サタンとは対照的に、私たちの主イエス・キリストは、まさに神の知恵なのです(コリント第一 1 章 24 節)。

d) 美のきわみ(エゼキエル 28 章 12 節): この言葉は、哀歌 2 章 15 節でエルサレムの美しさについても使われています。よく「完璧な美しさ」と訳されますが、正確には「美の全てを集めたもの」「総括するもの」という意味です(ヘブライ語の chaliyl,

lylk は、すべてを包含する全体性を意味しています)。創られた当初のサタンは、宇宙で最も壮大な生き物で、まさに美の典型であり、このような精巧な創造のわざを通して、神の麗しさが現れられていました。そのサタンの反逆によって、醜悪なものが全世界にはびこってしまい、その清めのために、すべてを火で焼き尽くすしかないまでになってしまうということは、悲劇です(ペテロ第二 3 章 10 節参照)。サタンとは対照的に、私たちの主イエス・キリストは、新しいエルサレムの比類のない美しい世界を永遠に治めることになります(黙示録 21-22 章)。

e) エデンの中 (エゼキエル 28 章 13 節): 前述(II, 6, a)のように、この「エデン」とは、創世記 1 章 3 節以降で更新されることになる前の、原始的な地球のことです。サタンは、理想的な環境の中で最高の被造物であったにもかかわらず、満足しませんでした。その反逆によって、サタンは完全な環境を火の池での永遠の住処と交換し、他の仲間も自分と運命を共にするようにとそそのかしたのは、悲劇的な話です(マタイ 25 章 41 節)。サタンとは対照的に、私たちの主イエス・キリストは、私たちのために場所を用意して下さいました(ヨハネ 14 章 1-4 節)。その場所は、最初のエデンをものぐ驚異的な場所です(黙示録 2 章 7 節)。

f) 貴重な石 (エゼキエル 28 章 13 節): この聖句で言及されている貴石は、確かにサタンの美しさをさらに表すものですが、同時に神の御前で天使たちを代表する者であることを示すものでもあると思われます。この文脈で言及されている九つの石は、大祭司の胸当てに置かれていた石と非常によく類似しています(出エジプト記 28 章 17-21 節、39 章 10-14 節)²⁶。出エジプト記の文脈では、それぞれの石はイスラエルの十二部族を表し、その名が宝石に刻まれていました。出エジプト記 28 章 29 節には、アロン(すなわち大祭司)が聖所に入るときには、「主の前に絶えず覚え」るために、十二部族の名が刻まれた石の付いた胸当てを「胸(心臓の位置)の上に」着けると書かれています。このように、イスラエルの各部族は、神の目には尊い宝石であり、大祭司が神の前に出るときには、このようにしていたのです。さらに、胸当ては、特定の部族に特定の任務を与えるために、主からの伝達手段としての実用的な機能も果たしていました²⁷。したがって、サタンも非常によく似た装具を身に付けていたとエゼキエルが

²⁶ これらの宝石の名前、順序、象徴、意味については、このシリーズの第 4 部 (III.3.a.1 項) で詳しく説明します。また、「来るべき試練」の第 6 部も参照してください。「宝石の土台とニュー・エルサレムの部族の門」も参照してください。

²⁷ 胸当ての宝石の順番は、主の導きを求めるときに使われました(民数記 27 章 21 節; 士師記 1 章 1-2 節を参照)。部族の神聖な選別によってレビ族が除外されていて、代わりにエフライムとマナセが挙げられていることから、これには軍事的な意図が表されてい

表現しているのは、同様の機能を果たしていると考えべきです。サタンは、「油を注がれた覆いのケルブ」(下記参照)として、天使を代表する第一人者として、主の前に絶えず現れていたことでしょう。²⁸以前、主の前で天使を代表していたサタンが、その仲間の多くを墮落させ、永遠の罰を受けるようにさせてしまったのは悲劇的なことです(マタイ 25 章 41 節)。これとは対照的に、私たちの主イエス・キリストは私たちを永遠の命へと導いてくださいます(ヘブル 2 章 10 節; 12 章 2 節、注意:この二つの節のギリシャ語「アルケゴス」は、ある訳では「創始者」と訳されたりしていますが、「指導者」または「ガイド(導き手)」と表現する方が良いでしょう)。主は私たちのために御自身の血で代価を支払って下さいました。

g) タンバリンと笛(エゼキエル 28 章 13 節): 欽定訳では、この二つのヘブル語の単語を、語彙的には古めかしい言葉で訳していますが、基本的には正確に表現しています(NIV 版を含む多くの現代版では、これらの単語を上述の宝石が装飾されていたという意味に捉えようとしています)。現代的な楽器の名前に訳することもできるかもしれませんが、しかし、本質的に楽器としての意味は変わりません。サタンは創造された日から、黄金の音楽装置、打楽器や管楽器を与えられ、神を賛美するための特別な資格を与えられていたのです。神を賛美するために造られた生き物であるサタンが、神を呪うためにその存在を捧げ、自らも永遠に呪われるという結果になるのは、悲劇です。サタンとは対照的に、キリストは私たちの代わりに呪いを受け(ガラテヤ 3 章 13 節、レビ 22 章 3 節)、私たちが神の賛美と栄光のために生きるようにして下さいました(エペソ 1 章 6, 12, 14 節)。

h) 油を注がれた者(エゼキエル 28 章 14 節): ここで「油を注がれた」と訳されている言葉(ミムシャック)とメシアを意味する言葉(メシアック)は、同じヘブライ語の語源(xwm, mashach)から来ており、非常に近い意味を持っています。どちらも「油を注ぐことで聖別される」ことを意味します。古代イスラエルでは、祭司(出エジプト 28 章 41 節)や君主(サム上 10 章 1 節; 16 章 1,13 節)がその職に就く際に、油を注ぐ習慣がありました。このような油注ぎは、神がその人を選んだことを示すものであり、神の力

て、軍隊の行進の順序(民数記 2 章)に従ったものであることは確実であると思われる。第 4 部、III.3.a.1 節を参照してください。

²⁸ 特に大祭司の胸当てとサタンを飾る宝石<九つの宝石: エゼキエル 28 章 13 節>の間に密接な類似性があることを考えると、天使の九種の部族を推定することはすることは妥当と思われます。これは、人間と天使の部門には、それぞれの選ばれた代表者がいるということでしょう。新しいエルサレムの城壁の基礎石には、キリストの十二使徒の名が刻まれています(黙示録 21 章 14,19-20 節)。

と支えを象徴しています。この油は聖霊を意味し(サムエル記上 6 章 13 節参照)、その導き、励まし、悟りは、主から霊的または実際の統治を任された者にとって特に重要です(詩篇 51 篇 11 節)。サタンは、文字通りの油を注がれたのではなく、最高の天使としての能力を助けるために、特別な量の聖霊が与えられました。この油注ぎによって、サタンは神の第一の被造物となりました。このようにして、神との交わりと神からの支援を受けるという比類ない機会を与えられたサタンが、その信頼を裏切り、神を完全に拒絶して、ただ自分の利益を追求しているというのは、悲劇的な話です。サタンとは対照的に、キリスト(その名は「油注がれた者」を意味する)は、父の御心に完全にゆだね、へりくだって私たちのために十字架上で死なれ、私たちも真のメシアに忠実に仕えるために聖霊の賜物を受けられるようにされました。

i) ケルブ(エゼキエル 28 章 14 節): 「ケルブ」という言葉から連想されるイメージと、聖書の「ケルブ(bvrk)」という言葉で指定されている存在には、かなりの違いがあります。聖書によれば、ケルブは天使の中でも最高の地位にあり、最も特権的な存在で、主の臨在に特別に近づくことができるという祝福を受けています。墮落前のサタンのケルブとしての特別な地位については、サタンに代わって登場したケルブたちの記述から知ることができます²⁹。また、おそらくケルブの最も重要な任務は、神の臨在と交わりへのアクセスを管理することです(この任務は、人間が園から追放された後、「いのちの木への道」を守ったことから、とてもはっきりしています。(創世記 3 章 24 節)。それゆえ、驚くことではありませんが、ケルブは通常、神の御座と密接に関連しています。すなわち、先に見たように、神の移動式の「戦車の御座」(契約の箱の上にある「慈悲の座(贖罪所、宥めの蓋)」で表されます)。神はケルブの間に座しておられます(詩篇 80 篇 1 節)。モーセに語りかけたのも「ケルブの間」からでした(出エジプト 25 章 22 節)。イザヤ書 6 章のセラフィムや、黙示録の「生き物」(特に黙示録 4 章 6 節)は、これらの同じ生き物を表しています。これらの例では、描かれている生き物は複数の翼を持つ天使で、神の御座と密接に関係しており、神を礼拝しながら神の戦車の御座を覆います(時には推進させます)。生きている生き物とセラフを別の序列に属する天使とする人もいますが、これらの付加的な名前は、同じ機能と似たような記述から考えて、この最高位の天使の別の呼び名に過ぎないと考えの方が妥当でしょう。例えば、エゼキエルのケルブに似た複数の顔を持つ生き物は、イザヤのセラフと同じように「聖なる、聖なる、聖なる」と言って神を賛美します(イザヤ 6 章 3 節; 黙示録 4 章 8 節後半)。

ヘブル語のセラフ([rs])は「燃えるもの」という意味で、この呼び名は、エゼキエルが

²⁹ ケルビムとは、ヘブライ語のケルブの複数形を音訳したもので、"-iym" は男性名詞の複数形の接尾語です。

記した「この生き物のうちには、燃える炭の火のようなものがあり、たいまつのように」(エゼキエル 1 章 13 節; この火のイメージについては、申命記 4 章 24 節、詩篇 104 篇 4 節、エゼキエル 1 章 4 節; 10 章 2 節; 28 章 14 節、黙示録 4 章 2-6 節と比べて見て下さい)³⁰。これらのユニークな天使たちは、神の御座を守り、神の聖性をあらゆる不敬なものから守り、神の臨在へのアクセスをコントロールしています(幕屋の聖なる場所を守る幕に刺繍されていた天使たちと比較してみてください: 出エジプト記 26 章 1, 31 節)。サタンは、かつて神の聖性の保護を任されていたが、人類から父へのアクセスを奪うという自らの裏切りによって、神の臨在から永遠に遮断されてしまったということは、皮肉な話です。サタンとは対照的に、キリストは御父の計画を忠実に果たし、私たちのためにご自分を犠牲にすることによって、私たちがケルビムを越えて聖なる場所に入り、御父の臨在に近づくことができるようになったのです(ローマ 5 章 2 節、エペソ 2 章 18 節、3 章 12 節)。

j) 覆う者(エゼキエル 28 章 14 節) <新共同訳では「翼を広げて覆うケルブ」となっています>: 出エジプト記 25 章 20 節でも、契約の箱の憐みの座(神の玉座を表す)の上に立っているケルブ達(=ケルビム<ケルブの複数>)が、翼を広げて座を「覆う」と言われています(どちらの文脈でも同じヘブル語の動詞「サハク<網のように絡み合う、おお、守るの意>」が使われています)。この同じ動詞の言葉は、至聖所の「垂れ」幕にも使われています(出エジプト記 40 章 3, 21 節)。詩篇の中でこの言葉が使われていることから分かるように、ここでの主な意味は「隔てる」または「守る」ということです(例えば、詩篇 5 篇 11 節、91 篇 4 節、140 篇 7 節)。したがって、サタンの元々の立場は、神の絶妙な神聖さから不敬なものをすべて遠ざける役割を担う、究極の「近衛兵」であったと言えるでしょう(今まで見てきたように、その役割のための多数のケルブがいます)。不敬なものに対する防波堤としてのサタンの立場が、彼自身の反逆によって、神の神聖さにとってあらゆる嫌悪すべきものの唱道者に変えられてしまったのは、悲劇的な皮肉です。サタンとは対照的に、キリストは、父の計画を実現するために、「私たちのために罪となり、私たちが彼にあって神の義とされる」(コリント第二 5 章 21 節)ように、ご自身を罪から完全に聖別しておられました。

k) 神の聖なる山の上(エゼキエル 28 章 14 節): これは、完全な原初の地球のことを指しています(前述 II.6.a 項参照)。サタンは、神の創造の最初の完璧さの中で、反逆によってその地位を損ない、この祝福された住処を究極の呪いの火の池と交

³⁰ 生き物は「御座の周りの御座の中心に」(啓示 4:6b)、つまり御座の四隅にあり、御座と密接に関係しています。ケルビムは「その(御座の)中に」(エゼキ 1:4)、セラフはイザヤ書 6 章の(固定した)地の御座の「上に」(同)あります。

換してしまいました(黙示録 21 章 10 節)。サタンとは対照的に、キリストは私たちに代わって十字架の責め苦に耐えることによって、私たちのために真の聖なる場所への道、すなわち父の御前への道を開き、それによって究極の回復された樂園に私たちが入ることを永遠に保証してくださったのです(ヘブル 6 章 19-20 節)。

1) 火の石の間を歩く(エゼキエル 28 章 14,16 節)：聖書の中で唯一言及されている「火の石」は、大祭司の胸当てにある宝石のような記念の石のように思われます(上記 III.f 項参照)。しかし、胸当ての宝石が(サタンが身につけていた宝石のように)集合的な意味合いを持つのは対照的に、この「火の石」はむしろ、主の前で個々の天使の記憶を表しているようです。この機能は、新エルサレムの宝石の土台(各使徒の名が一つひとつの石に記されています:黙示録 21 章 14-21 節参照)や、「打ち勝つ」者に与えられる「白い石」にも類似しています。この石には、「それを受ける者のほかには、だれも知らない」名前が書かれています(黙示録 2 章 17 節)。サタンの記憶そのものが消されるという事実(16 節の「火の石の間からあなたを消え失せさせたく新改訳 IV>」、また申命記 12 章 3 節、イザヤ 26 章 14 節にもヘブル語「アバハド<破壊する、逃れさせない、自らを失う、無にする、などの意味>」が用いられていることも参照)も、この解釈を支持します。この石は、天使にとっては、信者にとっての「いのちの書」と同じような役割を果たします(出エジプト 32 章 32 節、ダニエル 12 章 1 節、ルカ 10 章 20 節、黙示録 20 章 15 節参照)。これらの石が「燃える」ものでなければならないことは、聖書の他の箇所にも記述されているように、天使と火との自然な親和性を考えれば、完全に理解できます(詩篇 104 篇 4 節、イザヤ 6 章 6 節、エゼキエル 10 章 2 節)。サタンは、主がすべての聖なる天使を個人的に覚えておられることを記念するこれらの記念碑を持つ自分の特別な場所を捨て、代わりにできるだけ多くの天使と人間を神から遠ざけるという使命に乗り出したのです。悲劇です。サタンとは対照的に、キリストは、全人類に悔い改めと救いをもたらすために、御父の前にご自身を記念として捧げられました(エペソ 5 章 2 節)。

結論：サタンは天使の中でも最上位の生き物であり、(キリストを除いて)誰も彼と匹敵することのない特別な地位と特権に恵まれていました。それほど卓越した地位を持っていた彼が、なぜそのようなその地位を危険にさらす(ましてや放棄する)のかという疑問を持ってしまうますが、事実は、悲しいことに、サタンはそのすべての恩恵や祝福に満足できず、サタンはもっと多くを望み、自分に与えられていない唯一のもの、つまり宇宙の支配権を求めたのです。神の王座の守護者では満足できず、王座を占拠することを望んだのです。

IV. サタンの性格、罪と墮落

1) サタンの性格： エゼキエル 28 章 15 節にはっきりと書かれているように、サタンは「罪のない者」として創造されました。なぜなら、この聖句によって、サタンが罪を犯すことは、神に由来する必然的な行動ではなく、サタンの自由意志による決定であったことが確証されるからです。サタンは罪もなく、罪を犯す必要もないように創造されました。サタンが仲間の天使や人類、そして自分自身にもたらした問題のすべての責任を負うのは、サタン自身です。サタンの墮落について、神は何の責任も負いません。サタンは、神から与えられた自由意志を利用して、神を拒絶し、代わりに悪の道を歩むことにしたのです。

私たちの誰もがそうであるように、サタンが神と善と真実のすべてを避ける決断をしたことは、必然的に悪と嘘の道を歩むことを意味しました。勘違いしていけないのは、中立の道はないということです。最終的には、自分の行動を完全に独立させることができる人は誰もいません。私たちは、善か悪か、真実か嘘か、神かサタンか、自分の仕える主人を選ぶだけです。今日、人間が直面している選択の問題は、人類の歴史が始まる前にサタンが直面していた問題と本質的に同じです。あの古くからの超越した被造物のように、私たちもまた、神に従うか、神より与えられた真理を受け入れるか、あるいは神を拒否して悪魔の嘘を受け入れるかを選ばなければなりません。

(神の道徳的な被造物のすべてにとってそうであるように)サタンの場合、選択の問題は最も重要です。アダムとエバがそうであったように、また現在あなたと私がそうであるように、サタンにも神と神の真理を拒否する選択が与えられなければなりません。実際的な意味で真理を拒否する機会が与えられたのでなければ、真の選択も真の自由意志というものもないでしょう。他に選択肢がないために、被造物が神を賛美し、神に従うしかないという状況を、神は明らかに望んでおらず、また意図していません。神が被造物に与えた自由意志の本質は、神を受け入れるか拒否するかという選択と密接に結びついていますが、それにもかかわらず、その選択の権限が与えられることは現実的で正当なものなのです。そうでなければ、私たちはロボットに過ぎず、道徳的にも動物と区別されません。

被造物に自由意志を与えるということは、神にとって莫大な犠牲なしに実現したわけではありません。あまりにも多くの天使や人間が与えられた選択という恵みの機会を神を拒絶するという勝手なことに利用してきました。最初の両親の悲惨な決断によって罪がはいってしまった人類を救うために、父なる神はご自身の愛する息子である、私たちの主イエス・キリストの十字架の死という究極の代償を払わなければならませんでした。

すべての人は自らの選択であったとしても、そうするしかなかったにしても、最終的には神を認めることになるので、いずれにせよ神が最終的な勝利を得ることになります。(イザヤ 45 章 23 節、ローマ 3 章 19 節; 14 章 10 節、ピリピ 2 章 10 節)。

サタンは、もともと罪のない者でしたが、与えられた自由を使って「**神からの自由**」を選ぶという過ちを犯しました。しかし、そのような考えは完全に幻想です。「神からの自由」とは、実際には奴隷状態であり、罪と死の虜になることであり、またサタンの虜でしかありません(ヘブル 2 章 14-15 節、イザヤ 14 章 17 節; 61 章 1 節、ヨハネ 8 章 34 節参照)。「だれかの僕(しもべ)になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕となる」のです(ローマ 6 章 16 節; ペテロ第二 2 章 19 節参照)。L.S.チェイファールが述べているように、私たちの問題は、「神からの独立」か「神との一体感」かということです。被造物である私たちは、実際には前者を達成することはできませんが、後者を選択する自由はあります。サタンは、最初は純粋で罪のない性格でしたが、神からの独立を宣言したことにより、必然的に嘘を受け入れ、嘘の父となってしまいました(ヨハネの福音書 8 章 44 節)。

2) サタンの罪: パウロがテモテに牧師の資格について指示した際、最後に「信者になって、間もないもの(新米)であってはならない」と警告しています。そうでないと、「高慢になって(傲慢になって)、悪魔と同じ審判を受ける」(テモテ第一 3 章 6 節)可能性があると言っています。ここでパウロが注意しているのは、プライド、つまり不当な優越感は、さらなる罪を生む温床になるということです。サタンの場合は確かにそうでした。神から与えられた資質や属性について抱いた法外なプライド(エゼキ 28 章 17 節)が、さらに墮落した考えや陰謀(イザヤ 14 章 13-14 節、エゼキエル 28 章 17 節)につながり、最終的には神への全面的な反逆という行動に出ることになりました。イザヤは、それが寛大さを表す創造主に対して逆らうことの究極の愚かさ、真実から遠く離れて墮落した考えであることを、私たちのため明記しています。

あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。(イザヤ書 14章13-14節)

これらの有名なサタンの五つの「**わたしは～する**」はすべて、同じ目的、つまり神の宇宙に対する支配を自分の支配に置き換えることを語っています。その意志の表明の一つひとつから、サタンの意図を具体的に知ることができます:

「**わたしは天に＜向かって＞のぼり**」: これまで見てきたように、「天にのぼる」では

ありません<「天に向かってのぼる」です>(上記 II.6.a 項参照)。原初のエデンは地上にあったことを思い出してください。さらに、集会の山の「高さ」は目がくらむほど高かったので、こうした表現が使われるようになったのです。(下記の「雲のいただきにのぼる」を参照してください。黙示録 21 章 16 節)。

「<わたしは>神の星々のはるか上に私の王座を上げ<新改訳IV>」: これらの「星々」は、私たちが見てきたように、他の天使たちのことです(ヨブ 25 章 3 節、詩篇 103 篇 20-21 節、イザヤ 40 章 26 節、ルカ 2 章 13 節参照)。サタンがそのような王座を持っていたという証拠はありません。彼は神の王座のケルブの守護者でしたが、その王座を奪おうとしたのです。サタンの現在の王座、つまり世界の支配は一時的なものに過ぎません(ルカ 10 章 18 節、ヨハネ 12 章 31 節)。

「<わたしは>北の果なる集会の山に座し」: この記述とエルサレムとの類似性については、上記 6a を参照してください。ここでサタンは、神の代わりに最高の支配者として就任する瞬間を想像しています。

「<わたしは>雲のいただきにのぼり」: 「星」に二重の意味があるように<実際の星と天使を意味する>、「雲」にも二重の意味があり、高いということと他の天使達を指しています(雲は神の集められた軍勢を表すのによく使われます。ダニエル 7 章 13 節、マタイ 26 章 64 節、テサロニケ第一 4 章 17 節、ヘブル 12 章 1 節、黙示録 1 章 7 節)。この考えは、最初の「わたしは～する」という宣誓をさらに三度も繰り返すことによって堅く断行する意思を表明しています。詩的ではない言葉で言えば、「わたしは、本気で～するつもりだ」という主張です。

「<わたしは>いと高き者のようになろう」 これは、サタンの計画とその本音の思いが、これ以上の曖昧さがないほどに明らかに表現されているものです。この言葉は、サタンの実際の思いを靈感された預言者が表現したものです。サタンが自分の行動の結果をしっかりと承知していたということは疑いの余地がありません。サタンは神に取って代わるつもりでした。人間の経験でもよくあることですが、このような頭の中の思いはやがて行動につながり、あからさまな罪を犯すまでになります。その結果として、サタンは反逆と墮落に至りました。

3) サタンの墮落 : イザヤ書 14 章が、サタンの思いの変化とその宣言、そして神への反逆が開始されるまでを描いているとすれば、エゼキエル書 28 章は、サタンの傲慢な計画が実行に移される過程が描かれています。しかし、その順序はほぼ逆順に述べられており、最初は結果が述べられ、それから原因へと遡って表現されています(15-17

節)。18 節でサタンに対する告発が詳しく説明されています。サタンは、全能の神である主に対して敵対者であり欺瞞者であると烙印を押す前に、サタンのクーデターや彼の革命的な基盤、そして彼に与えられた聖句の名前について考察し、これらの節に記されている物事をまず順を追って分析し、解釈していくことは役立つことでしょう。

あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚したゆえに、わたしはあなたを地に投げうち、王たちの前に置いて見せ物とした。(エゼキエル 28章17節)

イザヤが記録しているように、サタンは自分自身の姿によって傲慢になってしまいました。自分の美しさに自惚れ、精神的に墮落し、良心や性格が無感覚になり、神への健全な恐れと良心を破壊してしまいました(エペソ 4 章 19 節、テモテ第一の手紙 4 章 2 節参照)。節の後半に書かれている裁きは、完全に未来のものです。つまり、(神によって決定されているので)非常に確実な運命であり、すでに起こったこととして表現されています。その前の「地上に投げう」たれるという裁きは、艱難期の後半、いわゆる「大艱難」(黙示録 12 章 7-13 節)の間に行われます。後半の「王たちの前の見世物」になるというのは、サタンが最後に火の池に入れられることを指しています(黙示録 20 章 10 節)。サタンは、神から与えられた知恵を破壊し、恩知らずに神にも反抗したので、神は彼を滅ぼします。王になろうとする者は、王の王によって神が定められた王権の前にへりくだります(黙示録 21 章 24 節参照)。

あなたの商売が盛んになると、あなたの中に暴虐が満ちて、あなたは罪を犯した。それゆえ、わたしはあなたを神の山から汚れたものとして投げ出し、守護のケルブはあなたを火の石の間から追い出した<別訳：覆いのケルブよ、わたしは火の石の中から(あなたの記憶を)消し去った>。(エゼキエル28章16節)

サタンの陰謀は、ここで初めて明確に言及されています。つまり、五つの「わたしは～する」の計画を実行しようとするサタンの意図的な試みです。ここで「陰謀を企てる」と訳されているヘブライ語のラチャル(lkr)という言葉には、反復的な動き(「取引」または「売買」と、中傷という二つの意味があります。サタンの行ったことというのは、私たちが「陰謀」と称することによく合致しています。傲慢な態度が倒錯した思いにつながると(17 節)、これらの精神的な罪は、神を中傷し、仲間の天使たちを誘惑して謀反を起こさせ、いわゆるエゼキエルが指摘している「邪悪」な行いに発展しました。サタンは、神の評判を落として信者を増やし、自分の目的を達成しようとしていたのですが、神はここで、サタンに対するもう一つのふさわしい裁きを宣言しています。それは、サタンの評判はおろか、彼の記憶も将来的に消し去り、彼を宇宙の支配者という地位から物理

的に追放することです。

あなたの行いは、あなたが創造された日から、あなたに不正が見出されるまでは、完全だった。(新改訳Ⅳ エゼキエル 28章15節)

あなたは不正な商いで不義を重ね、あなたの聖所を汚した。わたしはあなたのうちから火を出し、あなたを焼き尽くした。こうして、すべての者が見ている前で、わたしはあなたを地上の灰とした。(新改訳Ⅳ エゼキエル 28章18節)

この二つの節は、この章句の最初と最後にあるものですが、どちらもサタンの罪と墮落を要約して述べています。15節では、主観的な視点がとられています。サタンは神を拒絶しましたが、そのことで神は責められません。サタンは自分自身の行為によって「不正」とされました。サタンは完全なものとして創造されていたのに、自分の罪のゆえに神との永遠のつながりと住处(すみか)を失ってしまったのです。18節は、客観的な視点からまとめられています。サタンの行為は「不義」(ヘブル語で「アヴン」^{vi}で、途方もなく僭越(せんえつ)な罪、およびその罪がもたらす罪悪感)と表現されています。ここでも「正しさの欠如」ととれますが、15節の「不正(アヴル)」(lvi)という言葉同様、サタン自身ではなく、サタンの行為、つまり、サタンの陰謀による行動に適用されています。ここでもまた、未来の裁きがすでに起こったものとして描写されており、その実現は疑いのないほど確実なものとなっています。サタンは、キリストの千年王国の統治の後、実際に火の池に投げ込まれます(黙示録 20 章 10 節)。サタンは、主の奥の院の管理を任されていたが、その信頼を裏切り、汚したので、神は、サタン自身が冒流され、その汚れが永遠の火の中で焼却されることを定められました。

a) サタンのクーデター：神様の王座を奪おうとしていたサタンは、微妙な立場にありました。サタンが邪悪な野望を思いついた時は、彼はひとりでした。しかしその比類なき傲慢さをもってしても、宇宙の主を追い落とすには、助けが必要であることを悟っていたに違いありません。ところでサタンにはいくつかの利点がありました。天使の中で最も優れた存在であるサタンは、他の天使たちに対して大きな影響力と権威が与えられていました。サタンの言うことを聞いてすぐに主に反抗する者はいないとしても、根回しをしっかりとるなら、何人かの仲間を動かすことは可能と思えたのでしょう。サタンの計画は、力づくで神を倒すことではなく(それがうまくいかないことは、自意識過剰のサタンにもはっきりと分かっていた)、クーデターを起こすことでした。サタンは、天使たちの忠誠心を勝ち取ることで、神には覆すことのできない既成事実<他の天使達を味方につけているという事実>を提示しようと考えたのです。天使たちが神ではなくサタンを選んだということ自体、自分を神の報復から守ることになると、悪魔は高を

括っていたようです。サタンの思考と戦略についてこうした結論に至ることは、必然と言えるでしょう。悪魔が反抗的な天使の一団で神を圧倒できると本当に思っていたと仮定するなら別ですが、(しかし、人間の歴史においてサタンが図った計略から見て、サタンは確かに、神の被造物の中で卓越した存在として、それ以上の狡猾さを持ち合わせていたことは明らかなです)。では、どうしてサタンは、他の天使たちを誘惑して自分に従わせることに成功したからといって、自分が反抗しようとした全知全能の神の怒りから免れることができると思ったのでしょうか？

この難問に対する答えは、サタンの神のご性格に対する誤った認識にあります。もちろん、サタンは、神が自分とその反乱を即座にかつ容易に打ち砕く力を持っていることを理解していました。しかし、サタンが期待していたのは、神の全能性に逆らうことができるかどうかではなく、神がご自身の完全な誠実さのゆえに、サタンとその従者たちを消滅させることはできないだろうということでした。「神が本当に愛があるというなら、自分の被造物に罰を与えたら、その愛と矛盾してしまうことになる」と悪魔が今日、主張しているように³¹、永遠の過去の時代に、サタンはその策略を、神ご自身の性格に賭けるという無茶なことをしました。神は、サタンを(彼が自分の側につかせることができると確信していた多くの天使たちと共に)滅ぼしてしまうなら、当時の多くの天使達が住んでいる調和のとれた宇宙の構造を、劇的に破壊して、とりかえしのつかないようなことになってしまう。神はそんなことをすることができるだろうか？ 和解の機会がなく、失われるものを置き換えて全体を復元する手段もないのだから、サタンは、自分が有罪とされることは考えられないと思ったに違いありません。なぜなら、それはサタンが知っている愛と公正と完全な神のイメージに真っ向から矛盾するからです。＜彼にとっては＞この和解の機会も、新しいもので置き換えて(失われたものを補充して)復元する手段のどちらも不可能に見えます。なぜなら、1) 神への反逆を償う方法はなく、その意味を完全に知り、理解していなければならないからです。また、2) 上記(I, 3d)で見たように、その性質上、サタンを選んだ天使の決断は、不変のものだからです。天使達の存在(神にとっては、私たち信者と同様に大切に意味のある存在です。先述の「火の石」の記念碑を参照してください)が、組織的に統合されて同時に創造されたことからして、悪魔によって損失された部分を一部分だけ補修して置き換えるなどということは、神の性格と矛盾する、ありえないことのように思われました³²。悪魔の考えたことは、この反

³¹ 神の属性がどのように完璧な調和を保ちながら(悪が示唆するような妥協なしに)機能するかという課題については、『聖書の必須教義』の第一部で述べられています。神学：神について <https://ichthys.com/1Theo.htm>

³² 足りないものを補うという神の一貫した恵み深い姿勢については、例えば、ゼロペハデの娘たちの例(申命記 25:5-6)や、レビレート婚の原則(民数記 27:1-11、創 2:18 も参

乱計画によって神は窮地に陥り、神自身の完全性によってサタンを宇宙の新しい事実上の主権者として容認せざるを得なくなるということです。

(このようにして見てくると)サタンの考えは、まったくの妄想であったとわかりますが、もともと神の創造物の中で最も賢い者であった悪魔にも、一理ありました。私たちは、自分の最初の両親の罪に対する神の寛大な和解と回復という(そして反抗的な天使の地位を従順な人間に置き換えること)対処から、私たちの神が、根本的にどんな方であるかということを知ることができます。創世記 1 章 1 節の最初の創造以来、主の計画は完璧で何物も抗しがたい力で進行してきました。常に神のご計画の中心にあったのは、私たちの創造と、ひとり子イエス・キリストを送って私たちための身代わりの死を遂げさせ、それによって私たちを回復させる(それによってサタンとその軍団に取って代わらせる)という、私たちに対する恵みでした。神は、この無比の恵みと御子という賜り物によって私たちを救うことで、悪魔の嘘を徹底的に暴き、神のご性質を全世界に向けて明らかに証明して下さったのです。

サタンは傲慢(ごうまん)であっても、神の性格について、神が公正で公平であるということは、わかっていましたが、その傲慢のゆえに、全知全能の主が正義と公正のために何をするかについて、どんな被造物も予想することができないという明白な事実に盲目になってしまいました。人間を創造し、キリストによる救いの選択肢を提供することによって、神は天使たちにこの正義と公平さ、そして神の愛の無限の深さを示しているのです。和解しようとするすべての人のために、神はご自身の性格を表されることに限界を設けず、和解のためご自身の御子を死に至らしめることさえされました。神から離れていたいと思う者のために、神はそれらの者たちの代わりとなる者を見つけることが正当化され(さらに神を選ぼうとしない者のために裁きを下され)ることになります。そしてこの最後の点は、置き換えること以上のことです。人間が救われ、私たちの人間性を共有するために来てくださったイエス・キリストと私たちが結婚することは、もともと失われていたものよりもはるかに多くのものを回復することになるのです。壊れたものをより強いものに治し、失われたものをより良いものに置き換えてくださる、私たちの神の筆舌に尽くせない、深遠な知恵です！ 私たちが主と共に永遠に住むことになる新しい天と地では、御子イエス・キリストにある忠実な被造物である私たちに対する神の無限の愛のゆえに、かつての祝福は私たちの理解を超えて何倍にもなるのです。

照)を比較することができます。＜レビレート婚：子がなくて夫と死別した妻は、血筋を絶やさないために夫の兄弟と結婚するという慣習。古代イスラエル、フン族、チベットなどにみられる。--「英辞郎」から引用＞

このようなクーデター(力比べではなく、政治的な陰謀に基づいた権威の転覆)に対する神の反応について、サタンが自分の予測を多くの天使に説いて自分の側に引き込むことができたことは、後の出来事から明らかです。天使たちはサタンに従う前に、その目論見の成功を確信する必要がありました。もし代わりに、全能の主からの迅速かつ即座の報復を受けることになると確信していたならば、自発的にサタンの大義に参加する者はあまりいなかったことでしょう。だから、それ以上の納得させられるものが必要でした。全宇宙の支配者になりたいというサタン自身の動機は明らかですが、彼の追従者になる可能性のある者たちを口説かなければなりません。パラダイスは、その目的のために神への反逆を強いるほどひどいものではなかったでしょうし、サタンが保証したとしても、神を裏切ることには少なくとも何らかのリスクが伴うという明白な事実を、彼らが理解しないはずはありません。サタンには、同僚たちが、永遠の罪を負うリスクをあえて賭けることを納得させるだけの説得力のあるプラットフォームが必要だったのです。

b) サタンの革命的な政策：天使も人間も、自分が持っていないもの、特に手に入らないものを欲しがるのは共通しているようです。アダムとエバの善悪の知識の木に対する最初の例は、このことを示す十分な証拠です(その後の約六千年の人類の歴史は言うまでもありません)。おそらく、神への反逆が安全に成功することを相手に確信させることよりも重要なものは、ポジティブな政策、つまり聴衆を誘惑し、欲望を煽るような目標が必要だったのではないのでしょうか。しかし、天使には何が欠けていて、何が必要なのでしょうか？ 天使は、私たちのように風雨にさらされることもなく、病気や時間の経過に悩まされることもなく、人間を刺激するような獲得欲をかき立てるような必要性もありません。しかし、人間がさいなまされている悩みや心配事から解放されている事実、つまり**天使には肉体がない**というその事実こそ、サタンは自分の最大のセールスポイント、同僚の霊的被造物らが永遠の未来を賭けて自分と運命を共にすることにおびき入れる最大の動機となるものがあつたのです。

私たち人間には霊的な部分と物質的な部分がありますが、天使はこれまで見てきたように、主に霊的な生き物です(上記 I, 3c 参照)。人間のような真の肉体を持たないことは、多くの点で祝福されています(墮落以降の人類共通の遺産である痛み、苦しみ、涙を天使たちは免れています)、多くの天使たちは肉体を持つ存在について「こんなかもしれない」と考えていたようです。サタンが神を追放しようとしたとき、人間はまだ創造されていませんでしたが、サタンとその従者たちが墮落した元のパラダイスは地球上にあったことを覚えていてください(前出の II、6a 参照)。ここでは、長年にわたって純粋な聖書信仰の妨げとなってきた化石記録について議論する時ではありませんが、少なくとも、その記録の多くが、今私たちが議論している<天使が反逆した>時

代のことであることは間違いないでしょう。聖書には書かれていませんが、原始的な地球が不毛の砂漠であったとは考えられません。神が創造されるものはすべて完璧です(イザヤ 45 章 18 節参照)。他に情報がないので、この元のパラダイスはあらゆる面で目を見張るものであり、あらゆる種類の植物が完全に備わっており、本研究にとって最も重要なことですが、(道徳的責任はないにしても)あらゆる生き物もすべて揃っていたと考えるのがよいでしょう。このような創造の秩序は、天使の興味をそそったことでしょう。天使は物質に影響を与えることができますが、肉体と精神の両方を持つ生き物の豊かな肉体的体験はできません。肉体を持っていないければ、肉体の感覚的な体験はできないのです。

今、聖書から天使について知っているすべてのことから、天使が動物や人間の体を所有することは、あらゆる点で神の意志と法則に反しています。サタンは自分の仲間の好奇心と興味を観察し、上述した罪深い動機の普遍的な原則を適用しました。肉体を持たず、他の生き物の体を所有することを禁じられていた彼らは、「自分たちが禁じられていた(サタンのプロパガンダ風の言い回しですが)」官能的で肉体的な生活を直接体験したかったのです。明らかに神は、神の命令に反して天使らがしようとしている津波のような動きを黙って見過ごすつもりはありませんでした(ましてや、化石記録のヒト科の部分で証明されているような、品種改良や遺伝子操作のプログラムなどは許されませんでした:このシリーズの第 2 回を参照)。神が天使らに「与えた」純粋な精神性から「逃れる」ための唯一の方法は、新しいリーダーの後ろについていき、神に反抗して欲しいものを手に入れることでした。

その結果、神は当時の世界に完全な破壊の雨を降らせました(第 2 回で紹介します)。興味深いことに、サタンに従う者たちの、本質的な姿とも言える、体を求める欲望が、なお実際に行動に表されたことを示す聖書の箇所がいくつかあります。

1. 天使は自分の肉体的な体は持たない: 天使は他の生き物の体を持っていないので、物質世界を感覚的に完全に経験することができません(上記2、3b参照)。コリント人への第一の手紙第15章にあるパウロの「体」のリストには「天の体」が書かれていますが、天使については言及していません。しかし、これは明らかに惑星を意味しています。また、天使の霊的な(つまり非物質的な)性質を強調している多くの箇所を上で見してきました(ヘブル1章7節; 1章14節; 2章14-16節 [特に16節])。このような人間(や動物)との根本的な違いは、天使が時折「神々」と呼ばれることがあるのを説明するのに役立ちます(つまり、人間の物質性よりも神の霊性との共通点が多いのです)。詩篇8篇5節<口語では「神」となっているところが新改訳IVでは「御使い」>; 82篇1, 6節)。天使は、私たちの物質的な部分が明らかにそうであるように、「肉と血」

ではありません(エペソ6章12節)。主が弟子たちに現れ、幽霊と思われたとき、主は弟子たちに「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊(Pneuma)には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」と命じました。(ルカの福音書24章39節)

彼が使ったギリシャ語の Pneuma (pneuma) という言葉は、天使が「霊」とみなされる箇所です(例えば、ヘブル人への手紙1章7, 14節)。天使は、肉体という重要な点で、私たちとは異なることを示すために、これ以上の確証はありません。

2. 創世記 3 章の蛇：(今では大きな驚きではありませんが) 聖書の中でサタンが初めて登場する時、サタンが肉の体を持つ蛇を所有していたことは偶然ではありません。文脈から、この特に「狡猾な」生き物がエバの特別なペットであり、悪魔にとって彼女を誘惑するための完璧な道具であったことが推測されます。先史時代の化石の調査からも、もしかしたら悪魔が蛇を選んだのは、もともと天使が爬虫類に魅了されていたからかもしれないとも思えます(このシリーズの第2部を参照)。さて、サタンにとって蛇を自分のものにすることは、自分の目的を達成するために必要だったのでしょうか(ユダを手に入れたときと同じように)。私たちが言えることは、物質的な生き物の体を所有することは、サタンの通常の手口の一部であり、それは墮天使が邪悪な目的を達成するために「しなければならない」以上のものであるということです。それはむしろ、彼らがしたくてたまらないことなのです。

3. 創世記 6 章の天使の侵入：ユダの手紙 6 節とペテロ第二の手紙 2 章 4 節のどちらからも明らかなように、「神の子らは、人の娘たち...を妻とした」(新改訳IV)ことは、人類の歴史において、神の基本原則に違反した大掛かりな悪魔の攻撃である天使の反乱を明解にするものです(創世記 6 章に記されている攻撃を詳細に扱ったこのシリーズの第5部を参照)。天使の子孫と人間の子孫が直接混ざったことは、サタンと彼に従う者たちが(彼らにとって)到達不可能なものであった肉体を手に入れようとしたことの明確な証明です。

4. 悪霊の軍団と豚：マルコの 5 章で、イエスが一人の男から悪霊の軍団を追い出したとき、これらの墮落した霊は「豚にはいらしてください。その中に送ってください」とイエスに「願い(懇願—新改訳IV)」しました(12 節)。人間の家から追い出される悪魔の天使たちは、たとえそれが粗末なものであっても、何か物質的なすみかを獲得しようと必死になっていたということは、明確で、それ以外に悪霊どものこの要求の動機を説明できるものはまずありません。

5. さまよえる霊 (ルカ 11 章 24-26 節): 「さまよえる霊」が以前、憑依(ひょうい)して<とりついて>いた人間のもとに戻ってくることは、私たちがあたりまえのものとして慣れている自分達、人間の肉体への墮天使達の「依存症」を考慮に入れたときに初めて完全に意味を成す、同様のケースです。悪魔は「休み場」(つまり、喜んで住みつかせてくれる他の場所)を求めて荒涼とした場所を行き巡りますが、この希望が果たせないと、以前の「すみか」(ギリシャ語で「オイコス」)に戻ります。コリント人への第二の手紙 5 章 2 節でパウロは、私たちが来るべき復活の体、つまり主と永遠に過ごすことになる「超」物質的な家を「高きところからのなつかしの家」と呼んでいます(ギリシャ語で「オイケテリオン」、上記の「すみか」に使われている言葉の愛称で、「文法的に」親しい意味で使われています)。私たちの物質的なすみか、つまり今も昔も私たちの霊を住まわす肉体というすみかは、神から与えられたものです。しかし、悪魔の計画は、他人のものであるそのすみかを力づくで奪うことであり、それこそ悪魔が自分に従う者たちをそそのかしてさせようとしている主要なことなのです。

サタンにそそのかされた天使たちに対するサタンの偽りの福音は、彼らの非官能的な状態からの「解放」を与えるものでした。サタンは、仲間が物質的な経験に興味を持っていることを知り、その好奇心をあからさまな欲望と反逆へと駆り立て、物質的な体の獲得に夢中にさせ、ひいてはそうした体験に依存させたのです(私たち人類の多くが薬物によって破壊されてしまうように)。そのため、エゼキエル 28 章 16 節と 18 節の盛んで不正な商売<「商売が盛ん」「不正な交易」>は、「キャンバシング(遊説)」や「キャンペーン」と訳すのが良いでしょう。サタンは自分の論議の課題をもって、大勢の天使たちの関心をそれに向けさせました。この点で、サタンのしたことは、正当な王である父ダビデを倒そうと陰謀を企てたアブサロムの活動によく似ています。アブサロムは、朝早く起きて、裁きを求めてエルサレムにやってくる人々に挨拶に行き、彼らがどんな案件を抱えていようと(その正当性にかかわらず)相手をほめそやし、自分が「裁き人」になりさえすれば、すべての人に正義がもたらされると誓っていたのです(サムエル記下 15 章 2-6 節)。アブサロムは、お世辞や偽りの約束によって、サタンが行ったであろうやり方で、「人々の心を奪い」ました。たくさんのことを約束してくれる魅力的な指導者(そして自分たちの目的の安全と成功を保証してくれる者)についていくという誘惑に、多くの天使たちは抵抗できませんでした³³。サタンは常に私たちの防御の最も弱いところを攻撃します。アダムとエバは肉体を持っていましたが、天使が持っているような膨大な知識はありませんでしたので、サタンはそのような欲望に訴えました。天使は膨大な知識を持っていましたが、物質的な肉体を持っていませんでしたので、悪

³³ このようなプロパガンダと篡奪(さんだつ)のパターンは、地上のサタンの手先となる反キリストが権力を握るときに再び見られることになる(ダニエル 11:21-45)。

魔はそこを攻撃することにしたのです。天使には膨大な知識がありましたが、物質的な体はありませんでした。確かに、私たちの最初の親が「善悪の知識」は必要ではなかったように、天使は物質的な体を必要としていませんでした。しかし、本当に必要なものを神に委ねるのではなく、自分が今持っていないものが絶対に必要なものだと勝手に決めつけ、「神に取り上げられている」と思い込んでしまうのは、あまりにも一般的な生き物の反応です(神は本来、私たちにとって有害なものから私たちを遠ざけることで、私たちの最善の利益を考えて下さっているに過ぎないのですが)。

おわりに： 神の対応：このような神の人格とその正当な支配に対する大反逆罪に対して、神はどのように対応されるのでしょうか。このシリーズの続きでは、神が息を呑むような方法でサタンとその反乱を処分し、一步ごとに神の栄光の輝きは増し加えられ、神に対して忠実な被造物には、初めに与えられていた以上の祝福が最後には与えられるという、神の完璧な計画の展開を見ていきます：

- * 原初の地球に対する神の裁きとその回復(第2部:創世記の空白期(ギャップ))。

- * 神による人間の創造とサタンの反抗(第3部:人間の目的、創造と墮落)。

- * 神による即座の裁きの抑止と、人類の歴史におけるサタンの邪悪な世界支配(第4部:サタンの世界システム:過去、現在、未来)。

- * サタンとその従者に対する神の究極の置き換えと最終的な裁き(第5部:裁き、回復、置き換え)